

シンポジウム
古代のしもつけを探る
— 飛鳥と東の飛鳥 —



ご挨拶

栃木県南部の本市を中心とした小山市、栃木市、上三川町、壬生町の3市2町域には、当地域独自の形態をもつ古墳が造られ、その地域的特徴から「しもつけ古墳群」と命名されており、現在、この古墳群の広域的な保護・活用を目指して検討を進めています。

本市では、こうした歴史的特性を「東の飛鳥」と名付け、文化遺産の保存活用による地域づくりを推進しています。

また、これらの古墳が分布する地域は、かつて「下毛野」国造が支配した領域の核となる地域と考えられています。

飛鳥時代には、本市域を本貫地とする下毛野朝臣古麻呂が、藤原不比等らと共に制定に大きく関与した大宝律令が完成し、新たな国づくりが始まりました。この新たな制度により、国名も「下毛野」から「下野」に改められ、それが今、私たちの暮らす「下野市」の名前の由来となったわけです。

今回のシンポジウムでは、古麻呂が活躍し、我が国の歴史の中心地であった飛鳥（都）と東国の一地域「しもつけ」とを対比することで、本市の持つ歴史的特性について再確認していただきたいと考えております。

シンポジウムの開催にあたり、多大なるご支援とご協力を頂きました関係機関ならびに関係各位に心より感謝申し上げます、ごあいさついたします。

令和元年 11 月

下野市長 広瀬 寿雄

目 次

ご挨拶

シンポジウムプログラム・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ i

「東の飛鳥プロジェクト」による

文化財を総合的に活用した地域づくり・・・・・・・・・・ ii

記念講演資料集

「「日本国」誕生の舞台－飛鳥・藤原の都－」・・・・・・・・・・ 1

東京学芸大学名誉教授 木下正史 氏

「東の飛鳥を考える－下野市周辺の遺跡の検討から－」・・・・・・・・ 23

前栃木県考古学会会長 橋本澄朗 氏

飛鳥時代略年表

飛鳥時代の主なできごと・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 31

シンポジウム「古代のしもつけを探る—飛鳥と東の飛鳥—」

開催目的

東の飛鳥プロジェクトによる、文化財を総合的に活用した地域づくりを進めるためシンポジウムを開催いたします。

飛鳥時代における「飛鳥の都」と「しもつけ」の情勢から古代日本国誕生の過程を学び、本市の有する歴史的特性である「東の飛鳥」についての理解を深めるとともに、これからの文化財の総合的な活用について考えます。

日時 令和元年 11 月 30 日（土） 午後 1 時 30 分～午後 5 時（開場：12 時 30 分）

会場 下野市役所 3 階会議室

プログラム

13：30～ **開会・主催者挨拶**

13：40～ **記念講演**

「「日本国」誕生の舞台—飛鳥・藤原の都—」（90 分）

東京学芸大学名誉教授 木下正史 氏

（史跡下野薬師寺跡保存整備委員会 会長）

15：10～ **休憩**

15：20～ 「東の飛鳥を考える—下野市周辺の遺跡の検討から—」

前栃木県考古学会会長 橋本澄朗 氏

（下野市文化財保存活用地域計画推進協議会会長）

16：20～ **休憩**

16：30～ **パネルディスカッション**

17：00～ **閉会**

「東の飛鳥プロジェクト」による文化財を総合的に活用した地域づくり

はじめに

下野市は、関東平野の北部、栃木県の中南部に位置し、都心から約 85 ㎞圏にあり、首都圏の一端を構成しています。市内には、JR 宇都宮線の小金井、自治医大、石橋の三駅、国道 4 号、新 4 国道、北関東横断道、国道 352 号など充実した交通網が整備され、都心へのアクセスも容易となっています。

また、市内の中央部に立地する自治医科大学と同附属病院には、最先端医療技術の集積と地域医療の充実が図られており、その周辺は快適な住環境が整備された市街地が広がっています。

さらに冬でも比較的温かい気候であり、降雪量が少ないうえに、夏は比較的涼しく台風などの自然災害が少ない環境であるため、いにしえより多くの人々が暮らしていました。こうしたことから古代においては、下野薬師寺・下野国分寺・尼寺などが設置され「下野国」の中心地として栄えた地域でもあります。本市の名称は、こうした歴史的特性に由来するものです。

歴史が語る住みやすさ

良好な自然条件を備えた本市に、最初に人が定住したのは今から約 11,000 年前の縄文時代草創期と考えられ、その頃の遺跡が発見されています。弥生時代の終わり頃（今から約 1,700 年前）には、南関東地方や東海地方からこの地域に多くの人々が移り住み、北関東でも早い時期に、県内で最古級の前方後方墳である三王山南塚 2 号墳が造られました。

その後、古墳時代の後半には、「下毛野」が成立し、この地を治めた首長の墓として、しもつけ古墳群が造られました。しもつけ古墳群の中の甲塚古墳からは、全国で唯一の機織形埴輪 2 体が見つかり、重要文化財に指定されています。

聖徳太子が活躍した頃、奈良の飛鳥地方に都が置かれ、国家の礎が整います。そして、乙巳の変・大化の改新（西暦 645 年以降）により、東国でも中央政府の取り決めが施行されます。そのために国や郡の役所（国府・郡衙）や都と東北を結ぶ主要幹線道路として東山道が設置されました。

701 年には、唐（中国）の法律を参考に大宝律令が制定されます。その制定には藤原不比等や下野国河内郡を出自とする下毛野朝臣古麻呂が関わっています。地方豪族である古麻呂が中央で活躍できたのは、頭脳明晰で多言語を用いることができ、諸外国の動向や法律に明るかったことが想定されます。また、この頃、下野薬師寺が下毛野氏一族の氏寺として建立されたといわれています。

741（天平 13 年）には、聖武天皇の「国分寺建立の詔」により、全国に国分寺・尼寺が設置されます。その際、「詔」には設置場所の諸条件が、詳しく記されています。「災害が少なく、安全安心な場所、国府に近く栄えている場所」を選ぶようにと指示されています。

実際に、昭和 40 年代から現在までに実施された 100 か所以上にわたる発掘調査では、大きな災害の痕跡は見つかっていません。

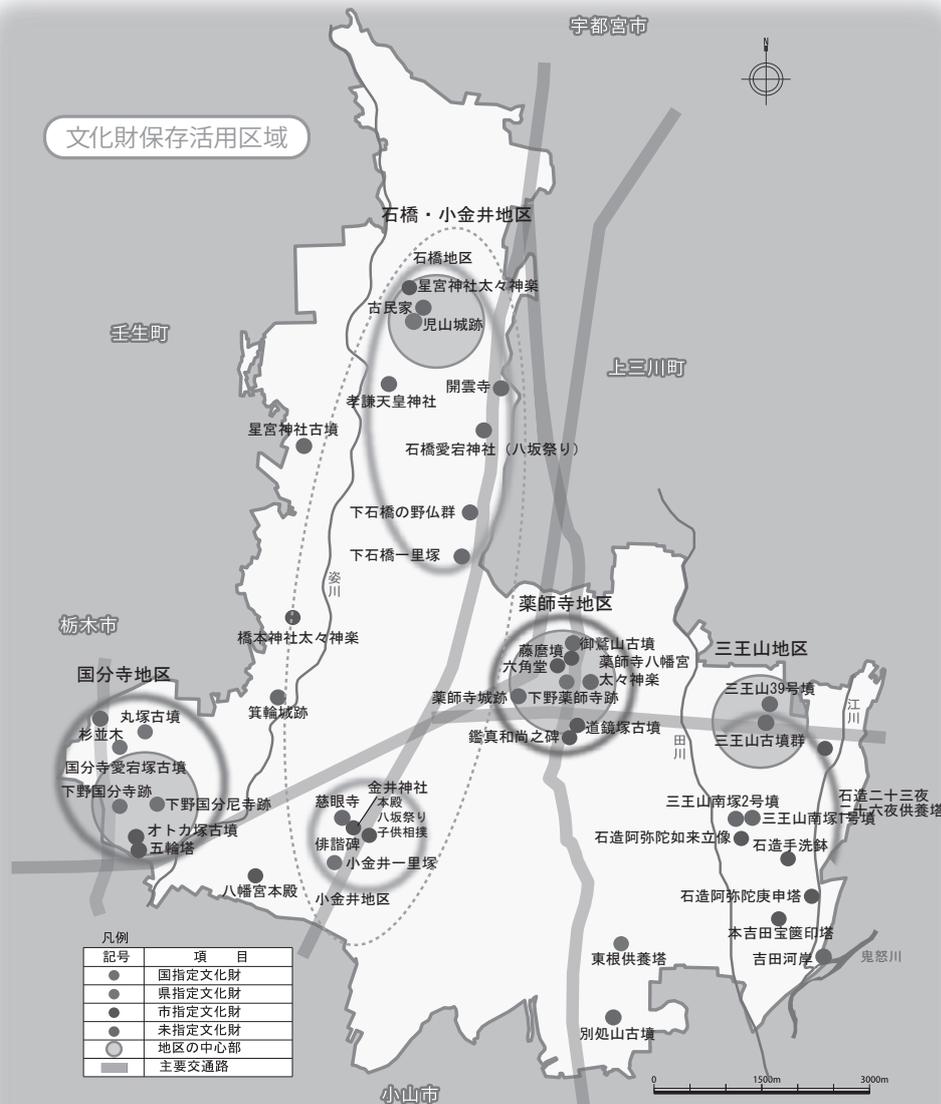
本市には、4 件の国指定の史跡と 3 件の県指定の史跡が所在します。さらに周知の埋蔵文化財包蔵地や古墳は 500 か所以上にも上り、約 75 万平方メートルの市域における遺跡の密度は県内随一を誇ります。本市がいかに住みやすい土地であったのかを、1 万年という悠久の歴史が証明しています。

東の飛鳥プロジェクト

このように本市には多数の文化財が存在します。その中でも特筆すべきことは、古墳時代から飛鳥・奈良時代にかけての東国を代表する史跡等が多数所在していることです。本市の歴史的特性が有する示す地域資源としての価値は、古代の都が置かれた飛鳥地方と並ぶほどといわれています。本市が培ってきた歴史をわかりやすく多くの皆さんにお伝えするために、東国における飛鳥地方のような歴史的特性を示す名称として「東の飛鳥」と名付けました。

この歴史的特性の保存を図るとともに、地域づくりや教育、観光の資源として総合的な活用を図るため、また、2016年度に策定した「下野市歴史文化基本構想」の具現化のためのロードマップとして「下野市文化財保存活用地域計画－東の飛鳥プロジェクト－」の策定を進めます。

文化財保存活用区域と文化財の保存活用方針



※国分寺地区と薬師寺地区は「下野市歴史的風致維向上計画」の重点区域に設定

石橋・小金井地区

- 下石橋一里塚の調査と保護
- 石橋・小金井地区の歴史文化まち歩き観光の推進
- 兎山城跡の調査
- 無形民俗文化財の継承推進
- 歴史的景観の保全と創出



県指定史跡兎山城跡

国分寺地区

- しもつけ風土記の丘資料館のリニューアル
- 史跡下野国分尼寺跡の第2期保存整備事業の推進
- 天平の丘公園等の再整備
- 周辺史跡・遺跡のガイダンス機能の充実
- 歴史的景観の保全と創出



しもつけ風土記の丘資料館

薬師寺地区

- 下野薬師寺跡の第3期保存整備事業の推進
- 下野薬師寺歴史館の機能拡充
- 薬師寺地区歴史文化まち歩き観光の育成
- 道の駅しもつけ、三王山ふれあい公園とのネットワーク
- 歴史的景観の保全と創出



下野薬師寺歴史館

三王山地区

- 三王山ふれあい公園の整備
- 道の駅しもつけ、三王山ふれあい公園とのネットワーク
- 三王山南塚1・2号墳の国指定史跡への指定に向けた取組
- 三王山古墳群の保存に向けた発掘調査の実施
- 歴史的景観の保全と創出



三王山南塚1・2号墳

「日本国」誕生の舞台

－ 飛鳥・藤原の都－

木下正史

A、飛鳥・藤原京の時代

- 1、この時代：明治維新と並ぶ日本の政治、社会、宗教、文化、生活の大きな転換期。
 - 1) 始まりと終わり：592年、推古天皇が豊浦宮で即位。以来、和銅3年(710)の元明天皇による平城京遷都までの約120年間。歴代天皇は飛鳥と周辺に宮都を営む
 - ①孝徳天皇の難波遷都(645～654年)、天智天皇の近江大津宮遷都(667～672年)：宮都は一時飛鳥を離れるが、一部施設は飛鳥に残り、都は再び飛鳥へと戻る。
 - 2) 飛鳥・藤原地域：政治・文化の中心地であり続ける。→飛鳥・藤原京時代と呼ぶ
 - 3) 3世紀～6世紀後半：「前方後円墳の時代」。ヤマト王権を中心として、各地の豪族層が連合する連合国家「倭国」の時代。
 - ①6世紀末：前方後円墳の築造を停止。古墳文化は変質、衰退、終焉(8世紀初頭)。
 - 4) 飛鳥・藤原京の時代：天皇を頂点とする律令制による中央集権的な統一国家、本格的な国家を作り上げていった時代。
 - ①中央集権国家：唐を中心とした東アジア社会に対して「日本国」と名乗る。
 - ②最高統治者：「大王(おほみかみ)」から「天皇」と称するようになる。
- 2、統一国家「日本国」を築きあげていく過程：様々の変革が飛鳥・藤原の地で始まる。
 - 1) 律令の編纂：政治・行政制度、官僚組織・官位制の整備、戸籍の作成・班田制・税制の整備など。
 - 2) 中央の「京」と「国郡」など地方の行政区画、京と地方を結ぶ交通・通信網の整備：
 - 3) 仏教・道教的思想・儒教の受容と浸透：
 - 4) 暦や時刻制、度量衡制の整備：政治の規律を整える制度。
 - 5) 富本銭・和同開珎の発行：貨幣制度の開始。中国の制度に倣いつつ独自に展開。
 - 6) 科学技術・芸術など：建築・測量、水道・噴水、苑池、造寺・造仏、寺院や古墳の壁画など中国系の最先端の科学や技術、芸術を受容し、独自のものへ改変。
 - 7) 医療・医薬、衣食住：漢方薬など漢法を取り入れ、中国風に整える。粉食、油・牛乳・乳製品利用の開始。金属製食器の採用、新様式の土器の創出。箸の使用
 - 8) 『古事記』や『日本書紀』など歴史書の編纂の本格化。『万葉集』歌の最盛期。
 - ①歴史書の編纂：中国の歴史書に倣う。「日本国」への国家意識の高まりによる。
- 3、東アジア社会との交流：「日本国」を作り上げ、飛鳥の新文化を育んだ大きな原動力
 - 1) この時代：隋唐、百済・高句麗・新羅など東アジア諸国との豊かな交流の時代。
 - 2) 国際交流：先進の政治・社会制度、宗教、文化、技術を導入。
 - 3) 東アジア社会との交流：5世紀以来、継続的。いくつかの画期がある。
 - ①5世紀～：朝鮮半島の百済・高句麗・新羅・伽耶から多くの人が渡来(東漢氏ら)
 - ②6世紀：新しい知識・技術を身につけた「今來の漢人」が渡来。
 - 4) 百済との交流：特に濃密。仏教や道教、様々な文化、知識・技術が伝えられる。
 - ①代表例：飛鳥寺造営。百済から造寺工・瓦工などが派遣され、東漢氏の工人が造営に参画。高句麗式伽藍配置。渡来系の鞍作止利(司馬氏)が丈六釈迦像を造像
 - ②初期の僧尼：百済や高句麗からの渡来僧や渡来人出身者。
 - 5) 7世紀初頭以来：遣隋使・遣唐使を派遣。
 - ①推古朝派遣の留学生・留学僧：南淵請安・高向玄理・日文など渡来系の人々。
 - ②留学生・留学僧：長安で数10年の留学生生活を終え、隋唐の最先端の政治・社会制度、思想・知識、技術、文化を身につけて帰国。
 - ③彼ら：大化改新後の政治・思想、新文化の形成に大きく寄与。
 - 6) 百済滅亡(660年)：百済政権を担った貴族層が亡命。→政治・文化に大きく貢献
 - 7) 渡来人が果たした功績：それを抜きにしては「日本国」誕生はありえなかった。
 - 8) 7世紀後半以降：唐の影響が顕著になる。大陸系文化が和風化(白鳳文化開花)。

- 4、飛鳥・藤原の歴史空間：一体的な歴史を歩んだ地域。
- 1) 範囲：奈良盆地東南部の明日香村、橿原市東南部、桜井市西南部、高取町北部。南北8km、東西6km。さらに広域に及ぶ。→時期により変遷。
 - ①飛鳥時代前半期：下ツ道・中ツ道・上ツ道(山田道)・横大路の幹線道路が整備。
 - ②軽市：下ツ道と山田道の交差点。飛鳥の人々の交易・交流、儀礼の結節点。
 - ③香具山東北方の磐余の地：舒明天皇が百濟大宮・百濟大寺を造営。
 - ④天武天皇の皇子宮(高市・大津皇子など)、大伴氏の居宅：香具山北方に分布。
 - 2) 飛鳥・藤原地域：「日本国」が作り上げられていく過程を物語る宮殿、官衙、祭祀・儀礼施設、庭園、寺院、古墳など様々の遺跡が良好な姿で埋もれている。
 - ①この範囲：どこを発掘しても飛鳥・藤原京時代の遺構・遺物を発見。重層する。
 - ②一連の歴史の舞台：面的に間断なくつながる。飛鳥・藤原地域は一つの巨大遺跡
 - ③『日本書紀』『万葉集』記載の宮殿・邸宅・寺院・庭園：それに関わる遺跡・地名が今も数多く残る。
 - 3) 発掘の本格化：1933年の石舞台古墳、1934～43年の藤原宮発掘。以来80余年。
 - ①1970年から：1日も休まず発掘。様々のことが判明。発掘した範囲は10%ほど。
 - ②木簡など大量の遺物が出土：→飛鳥・藤原は「歴史の無尽蔵の宝庫」。
- 5、飛鳥が宮都の地となった理由：蘇我氏が果たした役割が大きい。
- 1) 飛鳥最初の宮殿：豊浦宮。592年、推古天皇が即位。磐余から飛鳥へ遷宮。
 - 2) 推古天皇：欽明天皇の娘。母堅塩媛(蘇我稲目の娘)。馬子は叔父。蘇我氏の血筋
 - 3) 蘇我氏：6世紀中頃～7世紀中頃の約100年間、稲目・馬子・蝦夷・入鹿の四代にわたって権勢を誇り、政治を主導。屯倉の新しい経営方式を採用するなど朝廷の経済基盤を整え、百濟との外交を推進。仏教を積極的に受容し、最初の本格的寺院・飛鳥寺を建立するなど、飛鳥文化を開花させる。
 - ①古代国家誕生の揺籃期：政治・経済・文化・宗教など多方面で主役を演じ続ける
 - ②蘇我馬子：蘇我氏の権力を飛躍させ、天皇の存廃を左右するほどの権勢を誇る。
 - 4) 蘇我氏の飛鳥進出：東漢氏など先進的な渡来人を傘下に置きつつ、畝傍山の東から豊浦周辺へ、さらに飛鳥盆地内へと拠点を拡大して勢力を巨大化させる。
 - 5) 崇峻元年(588)：馬子は物部守屋を滅ぼして絶大の権力を握り、その戦勝を記念して、飛鳥盆地の真中に飛鳥寺を建立。
 - ①飛鳥寺：飛鳥盆地内最初の本格的施設。飛鳥時代の幕開けを告げる大記念物。
 - 6) 豊浦の地：蘇我氏の伝統的な拠点の地。飛鳥寺の造営中に豊浦宮へ遷宮。
 - 7) 蘇我馬子：豊浦宮への遷宮を主導。こうして飛鳥時代の扉が開かれる。
- 6、飛鳥・藤原京の時代：文明開化を成し遂げていった時代。「文明開化の時代」。
- 1) 『日本書紀』の編者が描く大化改新：社会が新たな段階に入ったことを強調。
 - ①大化2年(646)3月の薄葬令：『魏志』武帝紀などを引用しながら、大きな古墳を作ること、多くの副葬品を納めることは「愚俗」。こうした愚かしい「旧俗」は一切やめるよう命じる。
 - ②国家を作り上げるためには：古墳を造るという文明以前の「古い愚俗」を棄てて、文明化という社会全体の体質的な変革が必要だという。
 - 2) 古墳時代から飛鳥時代へ：どう理解すべきかを、教えてくれる。

B、古墳文化の変容、衰退、終焉—古墳時代からの決別

- 1、推古朝：前方後円墳が終焉。中国系の方墳を採用、小型化。→推古朝の「薄葬改革」
 - 1) 舒明天皇没後：天皇陵に八角形墳を創出。8世紀初頭まで6代の天皇に継承。
- 2、横穴式石室：7世紀初頭頃、自然石積み巨大横穴式石室が頂点を迎える(石舞台古墳)
 - 1) 7世紀中頃：切石積み石室を採用。やがて、石室は小型化。
 - 2) 石室内に家形石棺を安置する風習：継続される。墳丘の変化より遅れる。
 - 3) 7世紀後半以降：横口式石槨(石棺式石室)が主流化。遺体を木棺や漆塗棺に納めて石槨内に運び入れるようになる。副葬品は著しく減少し、唐製品が加わる。

- 4) 中尾山古墳：横口式石槨の狭い墓室内に火葬骨壺を納める。古墳は終焉。
- 4、立地・造墓：7世紀初頭頃には風水思想に基づく造墓が始まり、7世紀後半には定着
- 5、陵墓の地：7世紀中頃以降、檜隈・越・真弓など飛鳥西南方の丘陵地に固定化。
- 6、墳形、石室構造、造墓、壁画など：東アジアの影響を受けながら古墳は変質、衰退

C、飛鳥の宮殿構造の変容、京の成立

- 1、宮殿構造の変化：大王(天皇)権力の動向、政治機構・官僚制の展開と深く関わる。
 - 1) 宮殿構造：内裏と朝堂を中核とする宮殿から、これに官衙を付設する宮殿へ展開
 - 2) 推古天皇の小墾田宮：南に朝堂・朝庭の一郭、北に大殿(内裏)の一郭から成る。
 - ①宮殿の中核部の構造：後の本格的宮殿に継承される基本型が成立。
 - 3) 舒明2年(630)：初めて飛鳥南部に飛鳥岡本宮を営む。飛鳥に諸宮が定着する契機
 - ①舒明11年(639)：百濟大宮を百濟川辺(磐余の地)に造営。壮大な宮殿。
 - ②舒明朝：民を徴発して壮大な百濟大宮と天皇発願の最初の寺院・百濟大寺を造営八角形墳を創出。→舒明天皇時代は古代史上重要な時代。
 - 4) 乙巳の変後の孝徳朝の難波長柄豊碕宮：朝堂院・内裏の構造が整い、中枢施設の東西に官衙を配置する大規模(46%)で、画期的・本格的な宮殿構造が整う。
 - 5) 飛鳥還都後の斉明天皇の後飛鳥岡本宮：飛鳥宮跡上層遺跡。苑池を伴う。
 - ①構造：内郭(内裏)と外郭を中心に構成。内郭は3棟の正殿を南北に連ねる構造。
 - 6) 天武・持統天皇の飛鳥浄御原宮：後飛鳥岡本宮を継承し、改造。
 - ①内郭の東南方：エビノコ大殿を新営。『日本書紀』に「大極殿」とある建物に相当
 - ②朝堂院：存在せず。朝堂も明確さを欠く。難波宮との構造の違いが大きい。
 - 7) 飛鳥諸宮の建物構造の特徴：すべて伝統的な掘立柱建物で、高床建物。
 - ①中枢部の建物周囲：丁寧な石敷。「石の都」飛鳥。藤原宮・平城宮では衰退。
- 2、7世紀中頃以降：政治機構や官僚制・冠位(官位)制の整備が進む。官僚層が増大。
 - 1) 官僚層の増大：政治実務を執る官衙(役所)が整えられていく。
 - 2) 官衙：狭い飛鳥盆地内の宮殿という制約。官衙は、宮内のほか、天皇が住む宮殿の外で、飛鳥盆地内の各所にも分散して配置される。
 - 3) 官衙など宮殿付属施設の遺跡：斉明6年(660)、皇太子中大兄皇子初造の漏刻台跡(水落遺跡)、服属儀礼施設(石神遺跡、飛鳥寺西広場)、天皇祭祀施設(酒船石遺跡)、官営工房(飛鳥池遺跡)、天武朝の民官(民部省、雷丘付近)など。
- 3、7世紀後半の飛鳥盆地の平坦地：宮殿と付属施設、官衙、大寺で埋め尽くされる。
 - 1) 皇子宮や有力豪族層の邸宅、氏寺：盆地縁辺の傾斜地や盆地外にも造営される。
 - 2) 官僚層：飛鳥周辺の広域に集住。官人居住区が成立。都市的景観が成立。
 - 3) 『日本書紀』斉明5年(659)条：飛鳥に「京」(特別行政区)が成立したことを示す。
 - 4) 天武朝前後の飛鳥の「京」：「倭京」(壬申の乱の記事)、「京師」(天武朝)と記載。京域は藤原宮域を含む広域に及ぶ。

D、新しい宗教、仏教の受容と展開—新しい時代の象徴—

- 1、仏教公伝：538年、百濟聖明王が伝える。蘇我・物部の崇仏・廃仏をめぐる抗争。
 - 1) 最初の本格的寺院・飛鳥寺の造営：588年。仏教は本格的な歩み始める。
 - ①造営：百濟から造寺工ら派遣。渡来人が深く関与。百濟・高句麗の両要素をもつ
 - 2) 推古朝以降：豪族層による寺院造営が盛んとなり、興隆期を迎える。
 - ①寺院：宗教・思想のみでなく、新たな学術・文化・知識・技術などの集積の場。文化の総合殿堂。古墳に代わる新しい権威・文化の象徴。「文明開化の象徴」。
 - ②天武朝の飛鳥：24ヵ寺が壮観を競い、異国情緒豊かな仏教文化が花開く。
 - 3) 初期仏教・寺院の特徴：蘇我氏主導。氏寺。百濟様式が主流(山田寺が代表的)。
- 2、天皇発願寺院の創建：舒明11年(639)、百濟大寺を造営。
 - 1) 百濟大寺跡(吉備池廃寺)の九重塔・金堂：飛鳥諸寺を遥かに凌駕する破格の規模
 - 2) 九重塔の造営：東アジア諸国の国寺での鎮護国家仏教思想に倣ったもの。
 - ①百濟大寺：鎮護国家仏教、仏教国教化への大きな出発点。官寺の出発点。

- 3) 九重塔：国家筆頭大寺の象徴。天武朝大官大寺、文武朝大官大寺へと継承。
- 4) 鎮護国家仏教への歩み：斉明朝に明確になり、天武・持統朝に大きく展開。
 - ①仁王経・金光明経：鎮護国家思想の根本経典。京と地方で誦経(ずまう)を命ずる。
 - ②飛鳥三大官寺(国家寺院)制の成立：天武9年(675)。大官大寺・川原寺・飛鳥寺。
国家による仏教・僧尼の統制。仏教を基礎にした国家政治を推進。
 - ③藤原京四大寺：大官大寺(左京)・薬師寺(右京)・川原寺・飛鳥寺。
- 3、伽藍配置の変遷：飛鳥寺式(1塔3金堂＝高句麗様式)→四天王寺・山田寺式(1塔1金堂＝百濟様式)→法隆寺式(塔・金堂並列、新様式)、川原寺の複弁蓮華文軒丸瓦＝唐様式→薬師寺式(回廊内双塔＝新羅様式)、大官大寺式(回廊内1塔＝日本独自様式、飛鳥様式から天平様式への過渡期)。
- 4、道教的思想・陰陽五行思想：6世紀後半には本格的に受容。
 - 1) 推古10年(602)：百濟僧の観勒「暦の本・天文地理の書・遁甲方術の書を貢る」。
 - 2) 7世紀中頃以降：仏教とともに政治を牽引する思想として浸透。
 - 3) 道教的思想の影響：天皇称号、八角形陵、大極殿、星宿図・日月像・四神図など
 - ①道教的な祓いの呪具：斎串・人形・土馬など。7世紀後半以降、定着。
 - ②道教的な雨乞い：皇極朝に四方拝、牛馬の屠殺、市を閉鎖して雨乞い。
 - 4) 古くからの伝統的な自然崇拜：山岳信仰、河神崇拜、聖樹・巨石崇拜も色濃い。

E、律令国家「日本国」の成立と藤原宮・新益京の建設

- 1、7世紀後半以降：100年間の模索を経て、律令国家「日本国」が作り上げられる。
 - 1) 天武朝の画期：飛鳥浄御原令の編纂開始。六官制、官位制整備。官寺制整備。天皇称号定着。伊勢神宮式年遷宮・斎宮制の成立。大祓定着。記紀の編纂開始。
 - 2) 藤原宮と新益京：天武天皇が新しい政治の中心舞台として建設を計画。
 - ①藤原宮地決定：天武13年(684)3月。天武天皇の病と崩御により建設は頓挫。
 - ②藤原宮と京の本格的な建設：持統4年(690)の高市皇子の宮地視察に始まり、新益京と藤原宮の地鎮祭を行って建設を開始。
 - 3) 藤原宮遷都：持統8年(694)12月に実現。古代中国の宮都の制度に学んだわが国最初の本格的宮殿と条坊制都城が誕生。律令国家の政治の中心舞台。
 - 4) 藤原宮と新益京の建設と浄御原令の編纂：天武天皇の政治改革路線によるもの。
 - ①持統天皇にとっての藤原宮建設と浄御原令編纂：天武天皇の遺志の実現。
 - ②藤原宮と新益京：「天武・持統天皇の理想の都」。
- 2、藤原宮の特徴：巨大宮殿が誕生。1km四方で面積約84%。中央に南から北へ朝堂院・大極殿院、内裏が並び、これらの東西を中央官庁域にあてる。
 - 1) 構造の特色：諸施設を一体的に集約した機能的な本格的宮殿が成立。
 - 2) 宮殿建築の特徴：初めて礎石建ち瓦葺きの大陸様式の宮殿建築を採用。文明国家の宮殿として内外を意識した威容を整える。また、恒久的な宮殿をめざす。
 - ①内裏・官衙の建築：伝統的な掘立柱建物を採用。
 - 3) 本格的な大極殿の出現：天皇の政治・儀式の正殿。藤原宮の最重要の殿舎。
 - 4) 藤原宮：飛鳥諸宮から面積・構造ともに大きく飛躍を画した画期的な宮殿。
 - ①祖形：孝徳朝～天武朝の難波宮。その基本構造を継承。
 - ②藤原宮：平城宮以降の宮殿へ引き継がれる古代宮殿の基本形が成立。
- 3、新益京の誕生：碁盤目状に東西・南北に街路を通して街区を整然と区画したわが国最初の条坊制都城が成立。中国の条坊制都城に倣う。画期的なこと。
 - 1) 新益京の復原：南北10条、東西10坊、10里(5、3^里)四方説。中央に藤原宮が位置
 - 2) 『周礼』考工記が記す理想の都城を具現したとする説：定説化。課題が多い説。
 - ①儒教：『周礼』は儒教が重視する経書。儒教は日本に深くは浸透していない。
 - ②漢代以降の中国都城の最も重要な要素：羅城と、祖廟・社稷(左祖・右社)など礼制施設を設けること。日本の古代都城は、羅城、祖廟・社稷を設けていない。
 - ③古代中国の天円地方の世界観：地上を方形区画の重なりで捉える。方形都城の中

に宮城を置くが、都城の中心に宮城を置くことは本質的なことではない。

- ④面朝後市：新益京でも採用。
 - ⑤大和三山に囲まれた藤原宮・京：陰陽五行説に基づく聖地、理想の地と観念。
 - ⑥大官大寺と薬師寺の二大官寺を京内の東西に対置すること：唐長安城に倣う。
- 3) 「最大規模」・「計画性」：過大に評価し、意義づけることは疑問。
- ①齊明朝以来の京や倭京との関係：藤原宮・薬師寺下層で条坊道路・建物群を発見
 - ②下ッ道など7世紀初頭以来の幹線道路が重視されていること：どう位置づける？
- 4) 新益京の京名、地名(林坊・小治町・軽坊・浦坊)による街区の呼称：新益京が飛鳥で育まれた伝統の上に、それを利用しつつ成立した歴史の動きがにじみ出る

4、藤原宮大極殿院正門(南門)前での幢幡遺構の発見：

- 1) 文武5年(701)という年：体系法典「大宝律令」を完成させ、法治国家が成立した画期的な年。
- ①同年3月：最初の元号「大宝」が立てられ、30余年ぶりに遣唐使派遣を決定。
- 2) この年の元旦朝賀の儀式：律令国家の誕生を祝うかのごとく盛大に行われる。
- ①『続日本紀』文武5年正月朔日条：「天皇御大極殿受朝、其儀於正門樹烏形幢、左日像青竜朱雀幡、右月像玄武白虎幡、蕃夷使者陳列左右、文物之儀於是備矣」→大極殿正門前に銅烏幢、東西に四神・日月の幢幡を立てて元旦朝賀の儀式を行う
 - ②元旦朝賀の儀式：天皇が貴族や臣下、夷狄から年賀を受け、君主と臣下との関係や天皇の大権を確認する国家最重要の儀式。即位式と並ぶ「大儀(たいぎ)」。

5、天皇を頂点とする中央集権国家：

- 1) 政治制度の整備：大宝律令編纂・施行、律令に基づく中央・地方の政治・社会組織の整備、天皇称号制定、儀式・元号制の整備、遣唐使派遣の再開など。
- 2) 天皇政治を実現するための中枢施設：大極殿に象徴される中央政治の舞台・藤原宮と、都城新益京など本格的宮都が揃うことで中央集権国家は確立へと向う。
- 3) 大宝元年：本格的宮殿と都城を完成させ、体系法典「大宝律令」を編纂し、天皇を頂点とする律令制による中央集権国家「日本国」を作り上げた画期的な年。
- 4) 「文物の儀、是に備れり」：文物(儀式・威儀、学術・芸術、法律に関わる)の制度がここに至ってすべて整った。→新時代の幕開けを高らかに宣言。
- 5) 令制：元旦朝賀と即位の「大儀」では、大極殿前に7本の幢幡(宝幢)を立てる規定
- ①7本の宝幢：中央に銅烏幢、その東西に日月像と四神像の幡を立てる。
 - ②『延喜式』(927年)：元旦朝賀、即位の「大儀」では7本の幢幡を立てる規定。
 - ③「文安御即位調度之図」：即位式で立てた7本の幢幡の様子を描く。
 - ④平城宮後期大極殿の南庭：桓武天皇即位時の幢幡跡7ヵ所を発見。
- 6) 藤原宮大極殿院南門前：幢幡遺構発見。大宝元年元旦朝賀の儀式で立てた幢幡跡

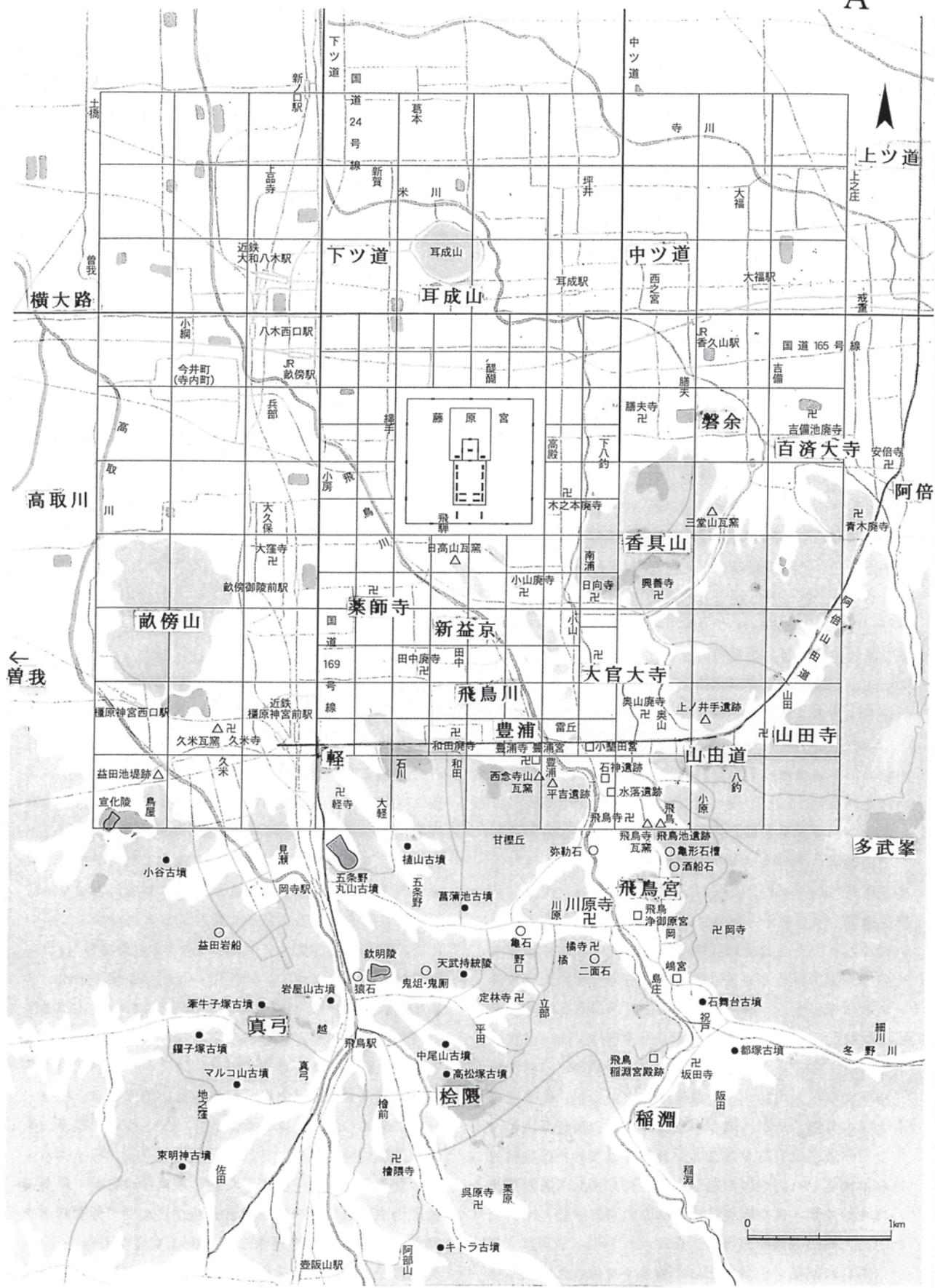
6、「天皇」称号と「大極殿」の名称：

- 1) 古代中国の地上界に対する考え方：天上界と同様の構造で、地上で起こる現象はすべて天上界のそれを反映したものと考える。宮殿も同様と考える。
- 2) 天子・天皇：天帝(天界の絶対神)の子として、天帝の命を受けて地上の統治を代行する。道教的思想。
- 3) 「太極殿(たいきょくでん)」・「大極殿」：天帝の宮殿である北極星(太極星)に基づく呼称
- ①魏の王宮正殿や唐長安城の正殿：「太極殿」と呼ぶ。皇帝による政治の正殿。
- 4) 天子・天皇の宮殿：北極星を中心とした天上界の宮殿を地上に再現したもの。
- ①天子・天皇：天帝の命を受けて、天帝の宮殿である太極星(北極星)に擬えた大極殿で、国家最重要の政治・儀式を行う。
- 5) 大極殿前に幢幡7本を立てて行う大儀：古代中国の道教的な陰陽五行説に基づく
- ①陰陽五行説：陰陽・五行の消長によって、天地の変異、災祥、人事の吉凶を説明する。日月は陰陽、四神は五行の木・火・金・水、鳥は土を象徴。
- 6) 天皇による統治思想の根幹：中国の道教的な陰陽五行説に基づく思想。

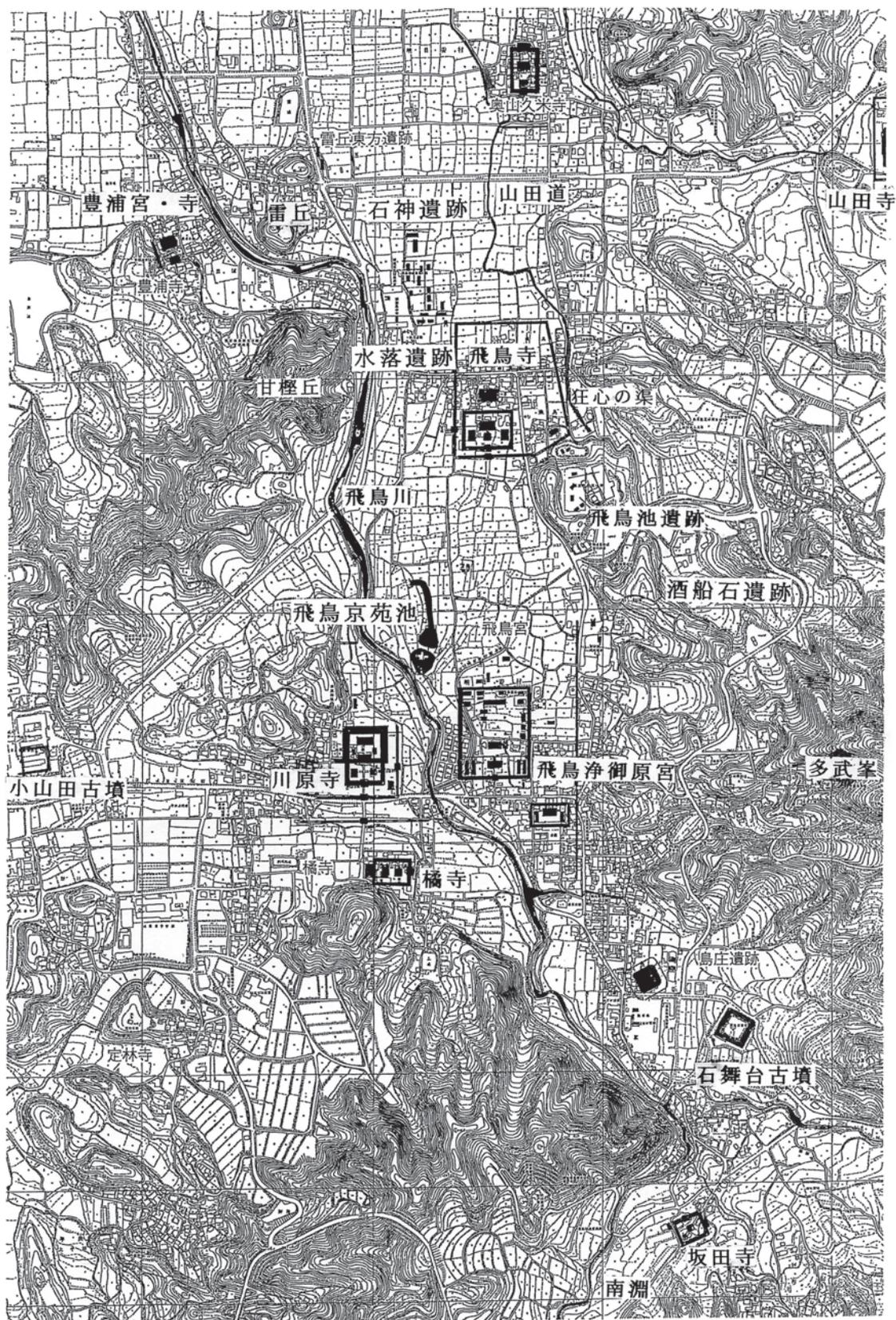
F、高松塚古墳・キトラ古墳の天文図・星宿図、日月図、四神図

- 1、壁画の内容：元旦朝賀や即位儀式で大極殿前に立てる7本の幢幡と共通。
- 2、高松塚古墳壁画：天井に星宿図、側壁に日月図・四神図、人物群像を描く。
 - 1) 星宿図：円形金箔で約120個の星を表現。朱線で結び星座を表す。
 - ①二十八宿：80cmの四角に北方・東方・南方・西方の七宿28組の星座を配置。
 - ②二十八宿の中央：北極星を中心とする星座群(紫微垣びん、最高神の天帝の居所とされる星座)のうち、北極五星と四輔の一部が残る。
 - ③内規・外規・赤道・黄道を描かない簡略図：星の運行の正確な表現を意図しない
 - 2) 日月図：金箔と銀箔で表現。下に赤い複数線で雲を表現し、三つの山岳を描く。
 - 3) 四神図：各側壁の上下の中央部に描く。
- 3、キトラ古墳壁画：天井に天文図・日月図、側壁に四神図・十二支図を描く。
 - 1) 天文図の特徴：星・星座とともに内規・外規・赤道・黄道を朱線で描く。
 - ①星：円形金箔で約360個を表現し、朱線で結んで星座を表す。
 - ②星座：二十八宿や内規内に紫微垣の星座群を含む68組の星座などを描く。
 - ③キトラ古墳の天文図：実際の天文図の原図を基に表現。高度な天文知識に基づいたもの。墳墓壁画の天文図の中で破格のもの。
 - ④中国・朝鮮半島の墳墓の天文図：デザイン化。星座など天象を象徴的に描く。
 - 2) 日月図：金箔・銀箔で描く。日像には黒い鳥の尾羽のような表現がある。
 - 3) 四神図：四壁の上部に描く。
 - 4) 獣頭人身十二支像：側壁の下部に描く。長袍を着け、武器を手にする。
- 4、古代中国の天文図・星宿図、四神図、日月図：
 - 1) 漢代の墓室壁画：しばしば星座と四神図を描く。
 - ①最古の二十八宿図：前5世紀。各方向の七宿を青龍・玄武・白虎・朱雀にあてる
(a)四神：もともとは、天界の四方の守り神。
 - ②四神図：次第に下方に移り、星宿図の中ではなく、墓室壁面に描くようになる。
 - ③唐代壁画墓：墓室天井の星宿(天文)図と、墓道側壁の四神図が重要な組み合わせ。
 - 2) 日月図：日像に三本足鳥、月像に月桂樹下で仙菓を搗く月兔、ヒキガエルを描く
 - ①月像の月兔・月桂樹・ヒキガエル：不老不死への願いを表現。
- 5、墓室天井に星宿・日月像を描く風習：漢代以降、広く普及。朝鮮・日本に伝来。
 - 1) 高句麗の壁画古墳：4世紀から発達。7世紀初頭に衰退。100基以上。平壤に集中
 - ①変遷：人物風俗図・日月星辰図(4~5世紀初頭)→人物風俗図・日月星辰図・四神図(5世紀前半~6世紀後半)→四神図(6世紀後半~7世紀初頭)。
 - ②四神塚：集安。6世紀後半。天井部の東面に日像(三本足鳥)、西面に月像(ヒキガエル)、天井石の側面に北斗七星など、側壁に四神図を描く。
 - 2) 百濟古墳壁画：6世紀前半~7世紀の王陵に四神図(壁面に大きく描く)。2例のみ
 - 3) 新羅の壁画古墳：極めて少ない。高句麗の影響を受けた北部の栄州に2例。
- 6、高松塚古墳・キトラ古墳の壁画：当時の政治・文化と、その国際性を物語る。
 - 1) 壁画：古代中国の宇宙観に基づく図像。天地の秩序が整い、地上の統治が正しく永遠に続いて循環することを願い描いたもの。
 - 2) 高松塚古墳・キトラ古墳の壁画：古代国家「日本国」が飛鳥・藤原の地で確立した頃の政治や思想、文化、国際交流の様子を目に見える形で分かり易く物語る。
 - 3) 飛鳥・藤原京時代に達成された事柄：今に引き継がれている。→日本の源流。

A



1、飛鳥・藤原地域の諸遺跡・地名など



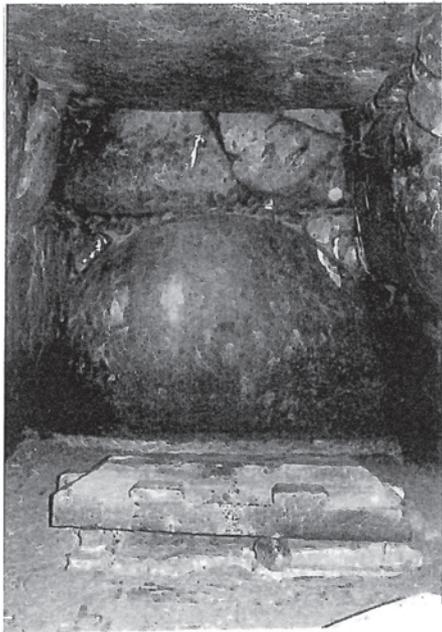
2、飛鳥中心部の宮殿・寺院など



1、五条野(見瀬)丸山古墳と周濠・外堤



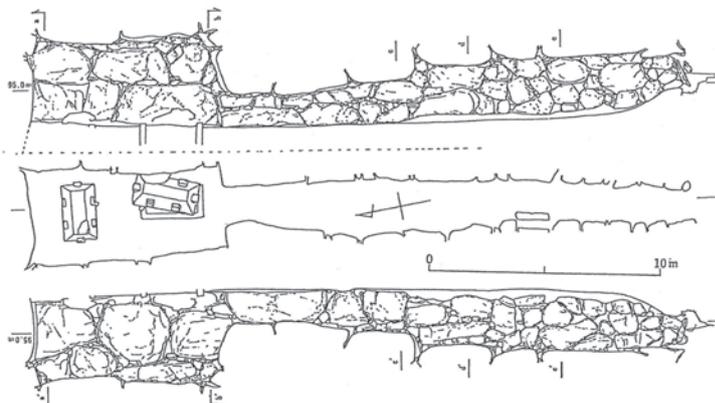
2、五条野丸山古墳



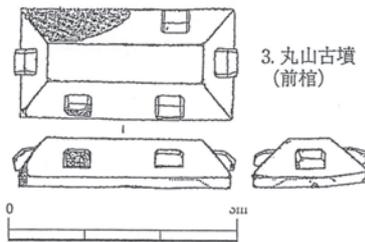
3、五条野丸山古墳の巨大石室・石棺



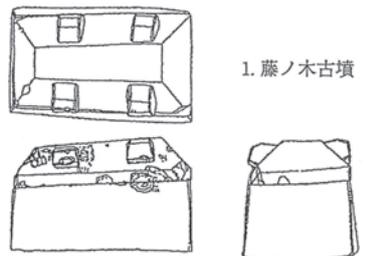
4、五条野丸山古墳の家形石棺



5、五条野丸山古墳の横穴式石室・家形石棺



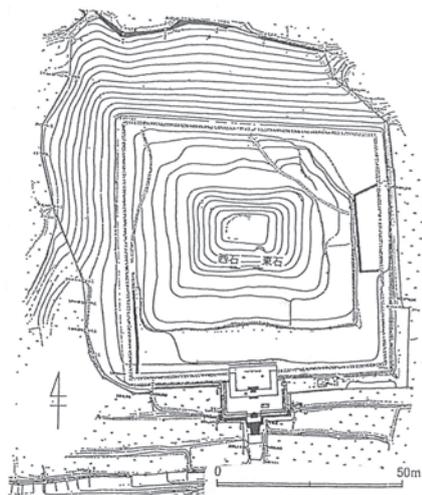
6、五条野丸山古墳の家形石棺



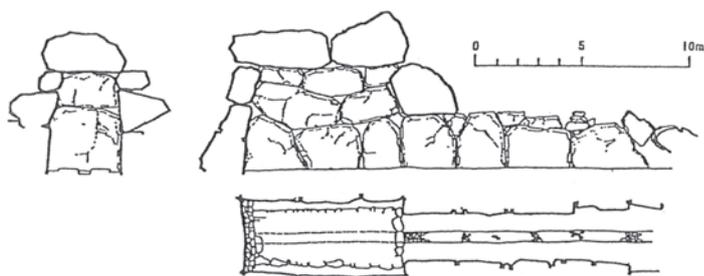
7、藤ノ木古墳の家形石棺



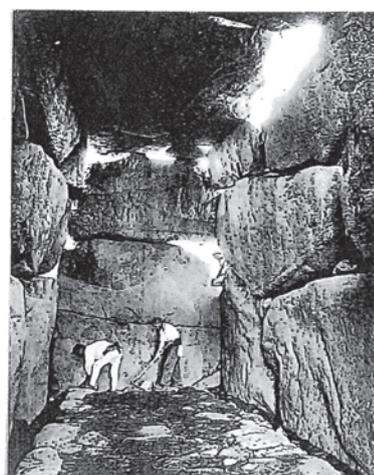
9、石舞台古墳と周濠・外堤・横穴式石室



8、山田高塚古墳(推古陵)



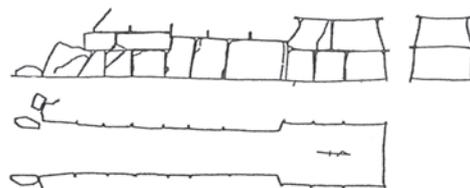
10、石舞台古墳の横穴式石室



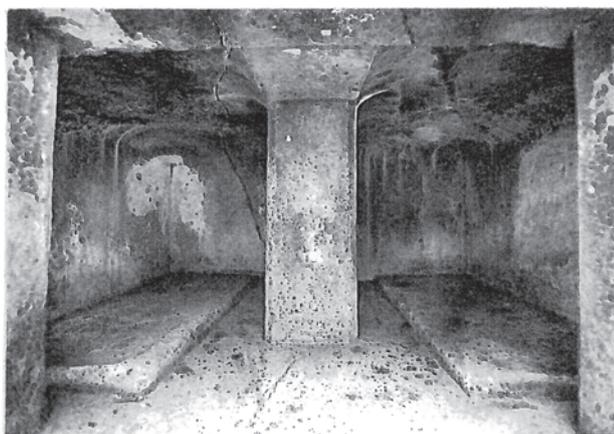
11、石舞台古墳の巨大横穴式石室



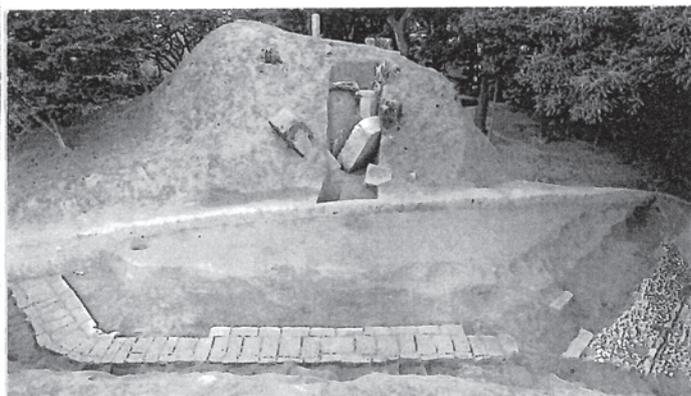
13、岩屋山古墳の切石積み石室



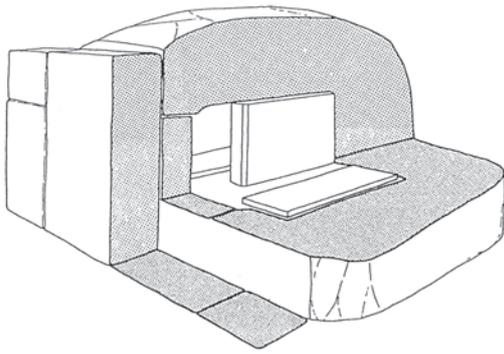
12、岩屋山古墳の横穴式石室



15、牽牛子塚古墳の石棺式石室



14、牽牛子塚古墳(八角形墳)



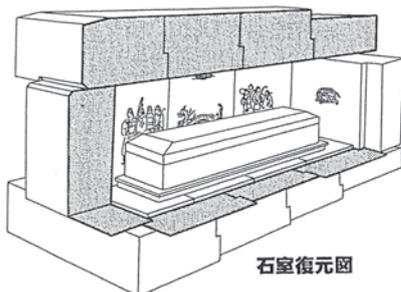
1、牽牛子塚古墳の石室透視図



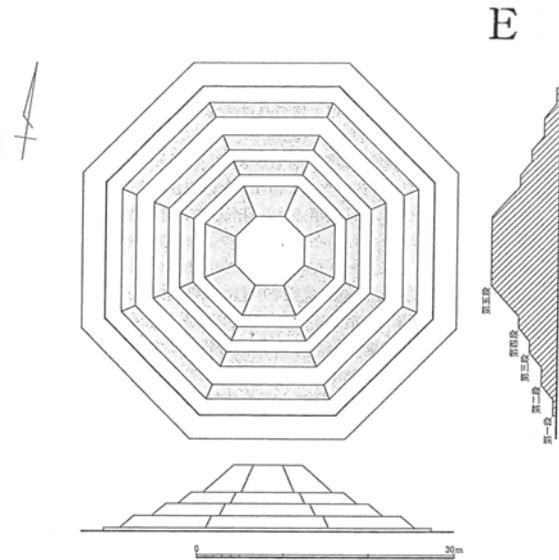
2、越塚御門古墳の石棺式石室



6、高松塚古墳の立地



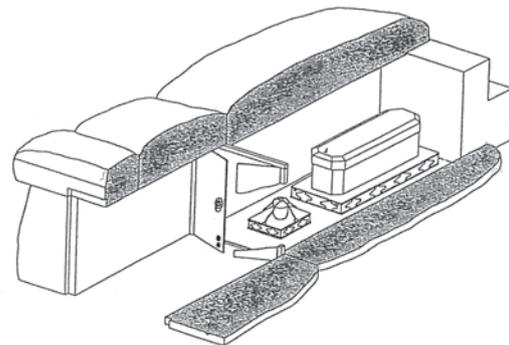
7、高松塚古墳の石室・木棺復元図



3、天武・持統天皇合葬陵復原図



4、天武・持統天皇合葬陵の裾部石組



5、天武・持統天皇合葬陵の石室と棺



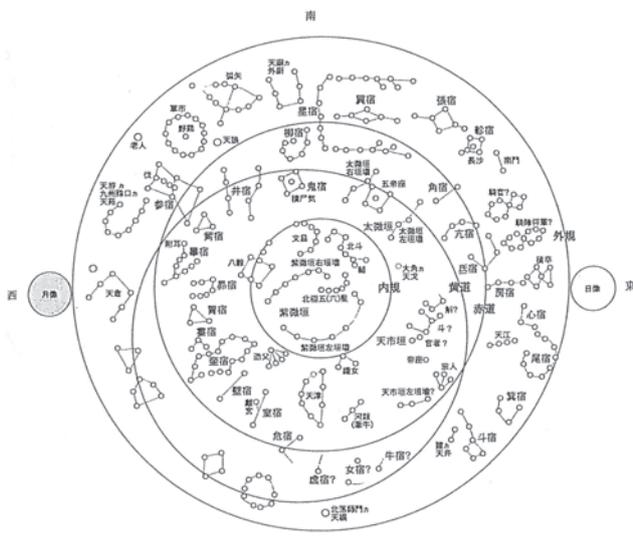
8、高松塚古墳の青龍壁画



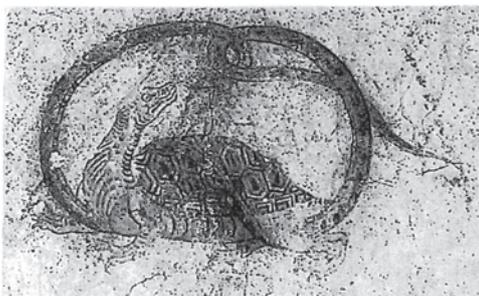
10、キトラ古墳の石棺式石室



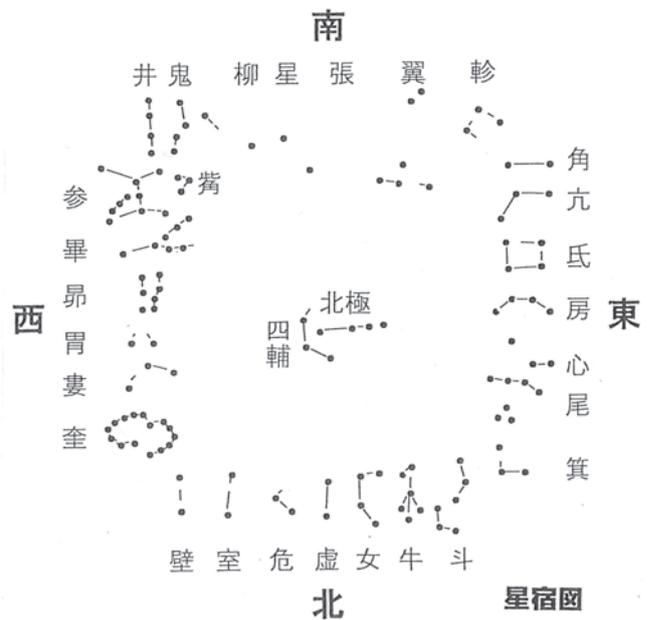
9、キトラ古墳の立地



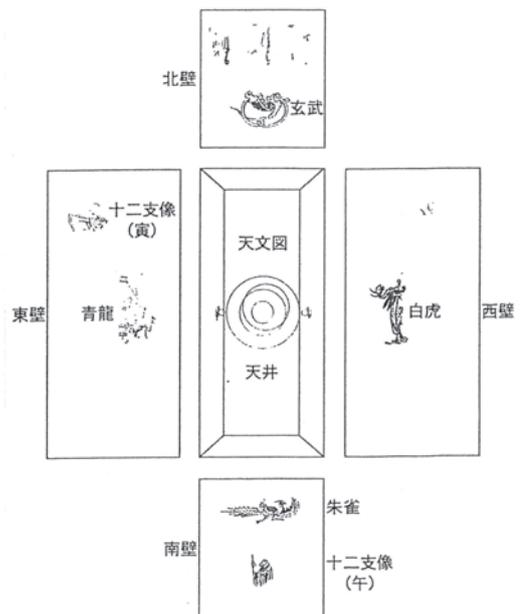
13、キトラ古墳石室天井の天文図



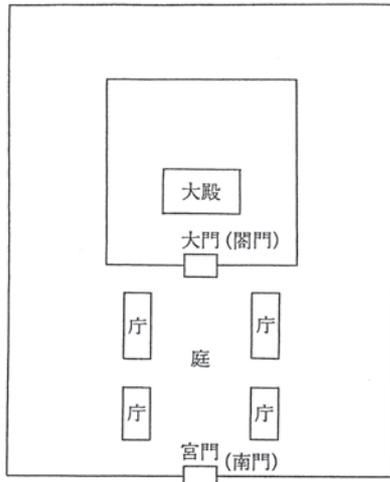
14、キトラ古墳の朱雀・玄武壁画



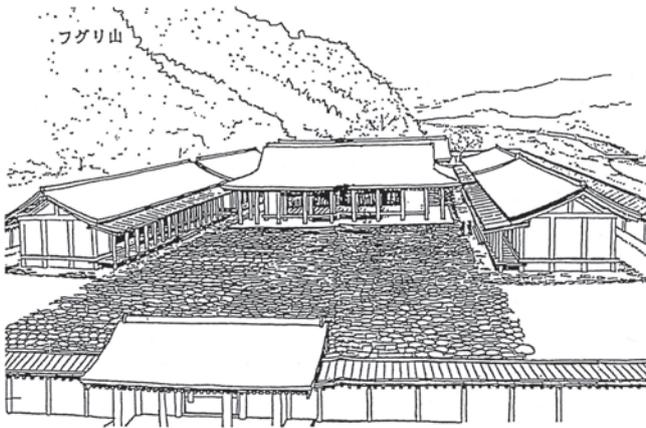
12、高松塚古墳石室天井の星宿図



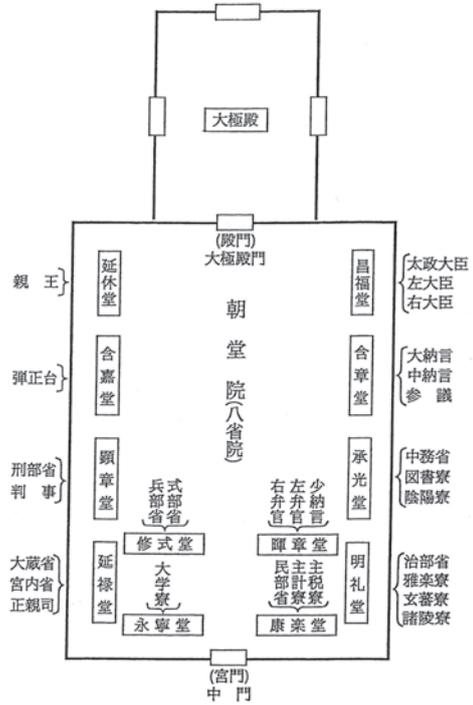
11、キトラ古墳石室の壁画展開図



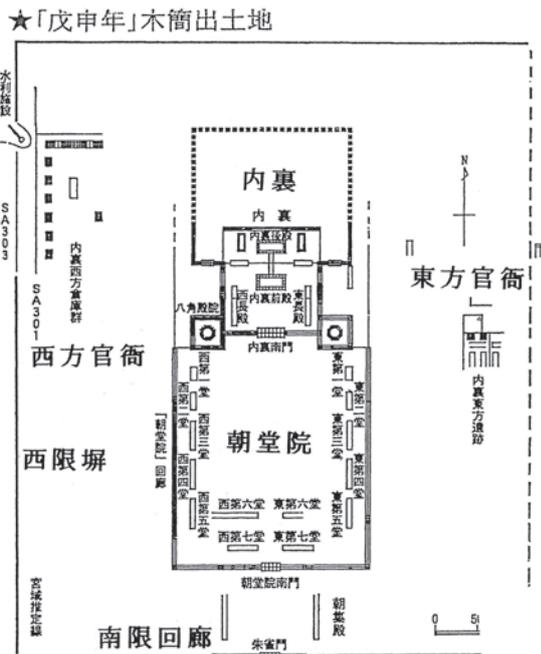
1、小墾田宮の構造復原模式図



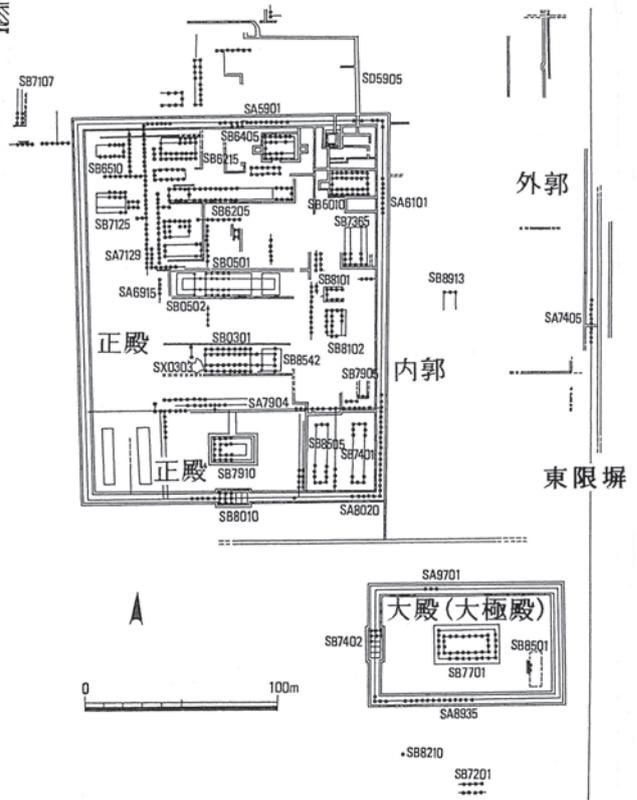
3、飛鳥稻淵宮殿跡復原図



2、朝堂院・大極殿概念図



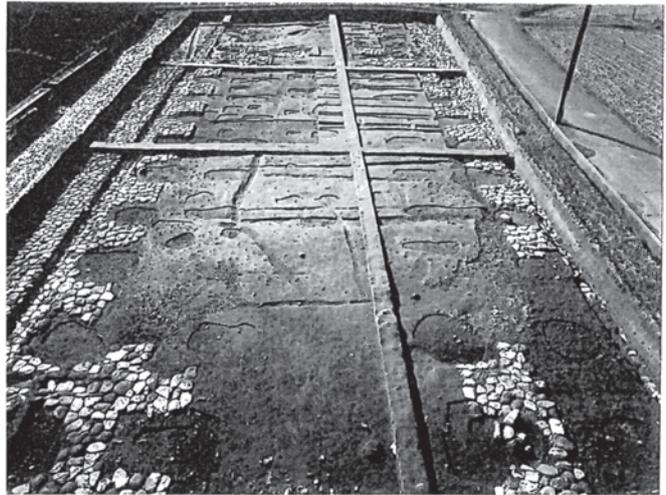
4、難波長柄豊碕宮全体図



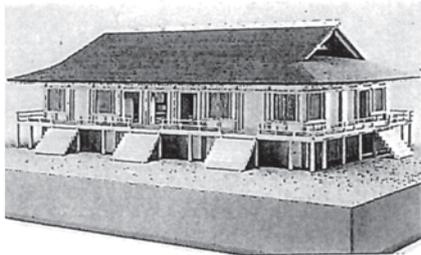
5、飛鳥浄御原宮中枢部の遺構



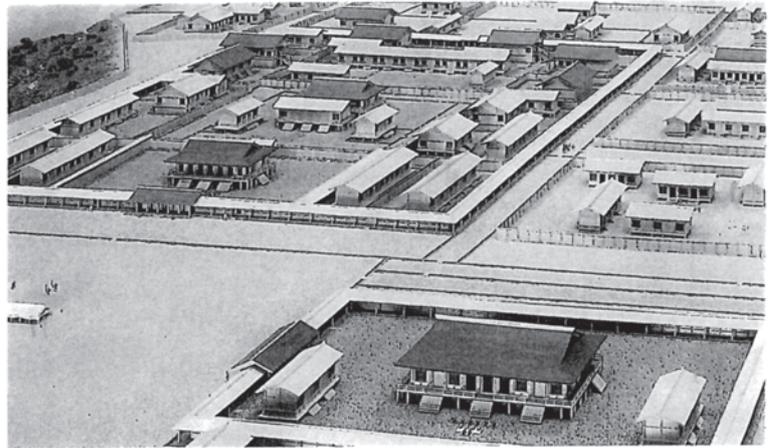
7、飛鳥浄御原宮の石敷井戸



6、飛鳥浄御原宮北区の南正殿



9、飛鳥浄御原宮エビノコ大殿
復原模型



8、飛鳥浄御原宮復原模型



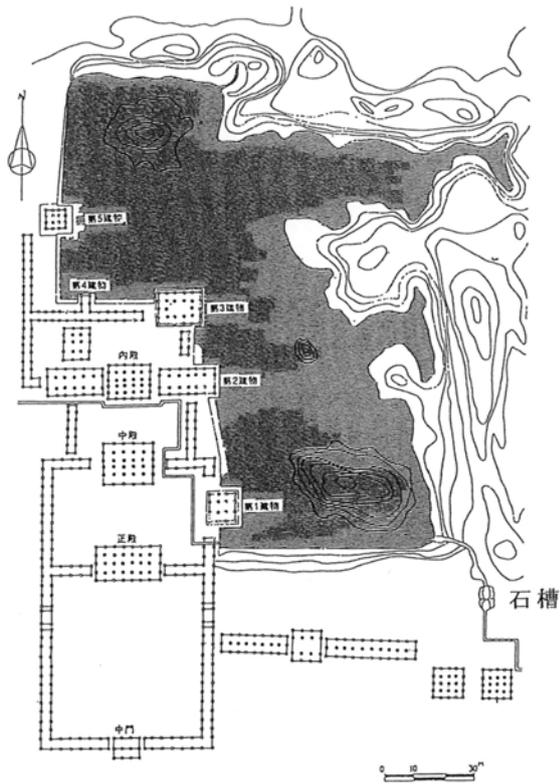
10、出水酒船石(2016年)



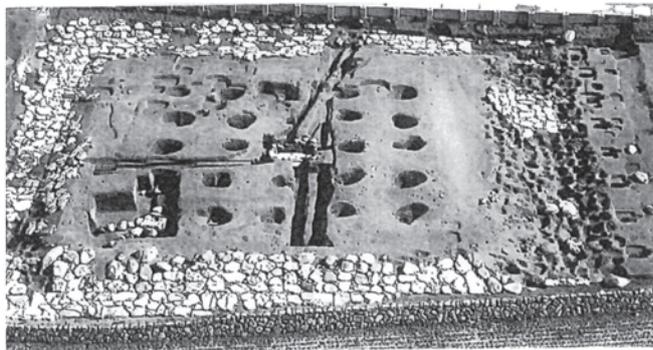
12、飛鳥宮苑池の中島・渡堤



11、飛鳥宮苑池の南池



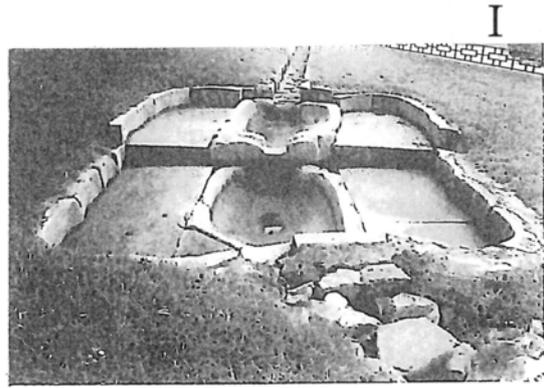
1、新羅・雁鴨池



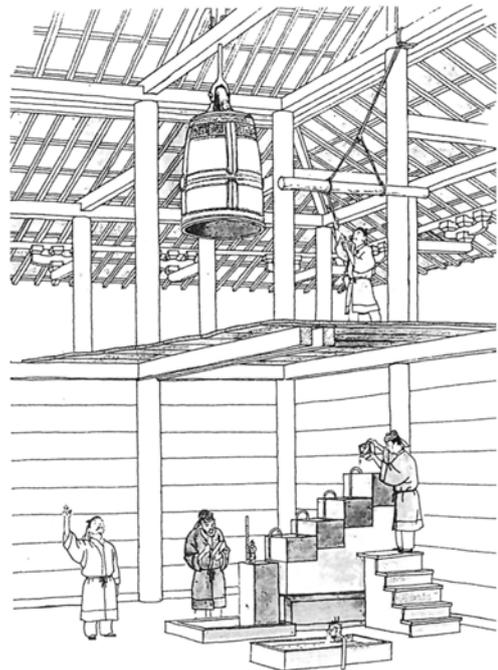
3、飛鳥水落遺跡全景(西から)



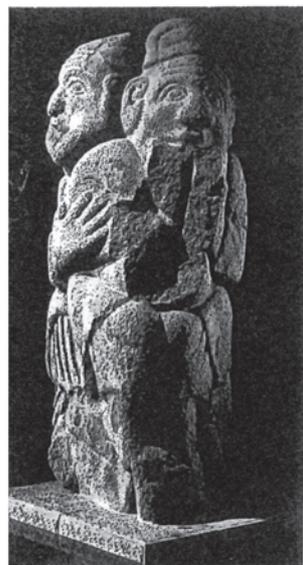
4、飛鳥水落遺跡全景(西北から)



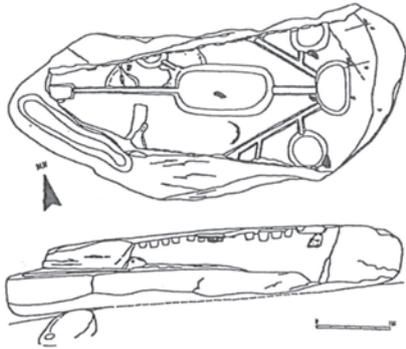
2、雁鴨池の導水路にある石槽



5、漏刻(水時計)台の内部復原図



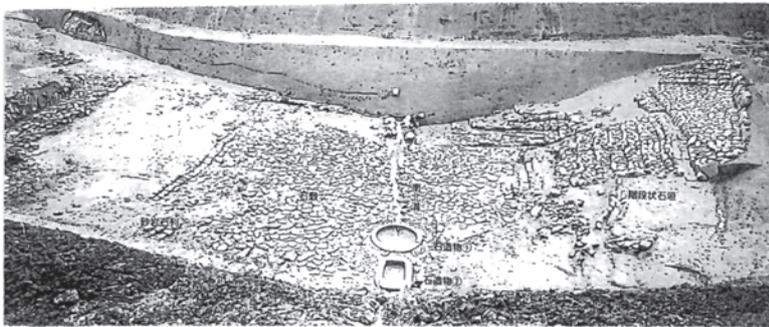
6、石神遺跡発見の石人像・須弥山石



8、酒船石の現況と実測図



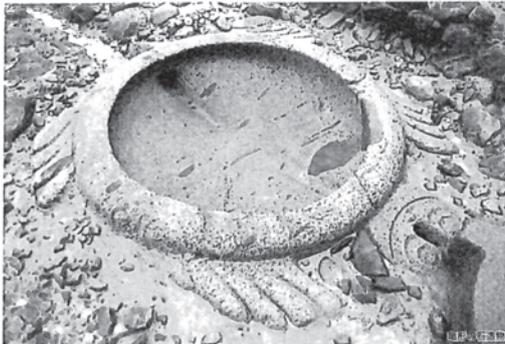
10、酒船石遺跡中腹の石垣



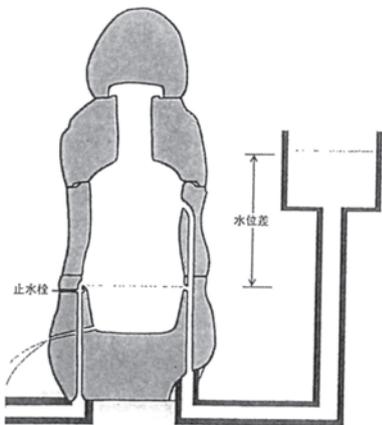
11、酒船石遺跡の石敷と石製水槽



12、酒船石遺跡の湧水施設と石製水槽



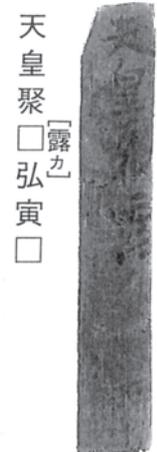
13、酒船石遺跡の亀形石槽



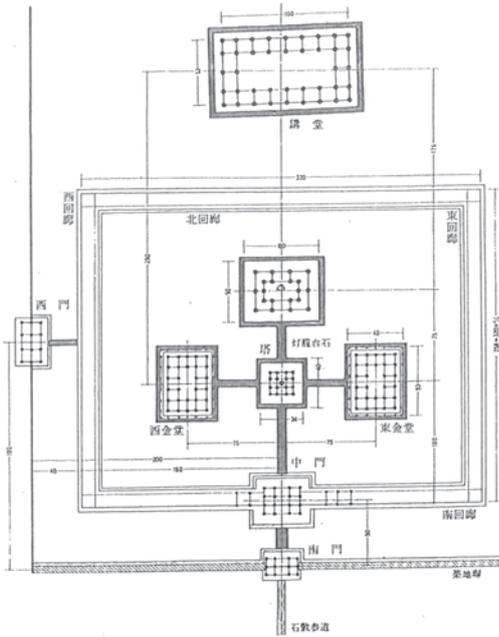
7、須弥山石噴水のしくみ



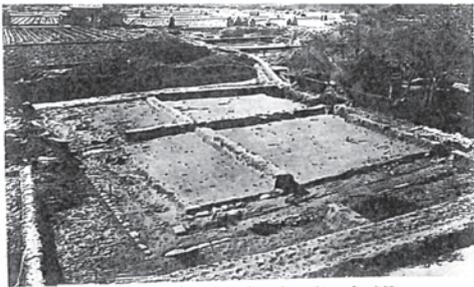
14、飛鳥池遺跡出土の「富本銭」と鑄棹



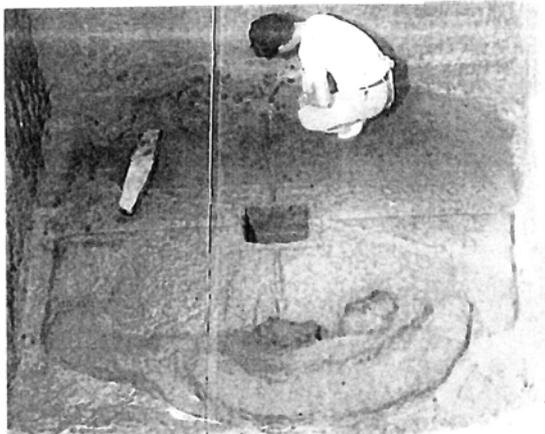
15、飛鳥池遺跡出土の「天皇」木筒



1、飛鳥寺伽藍復原図



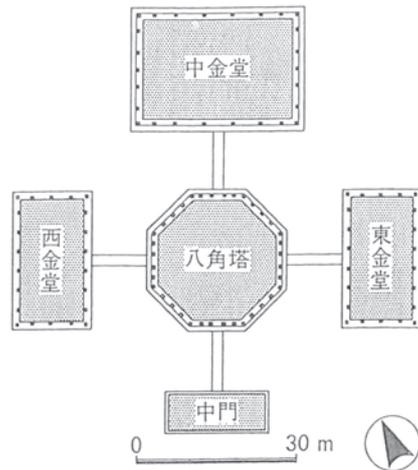
2、飛鳥寺東金堂遺構



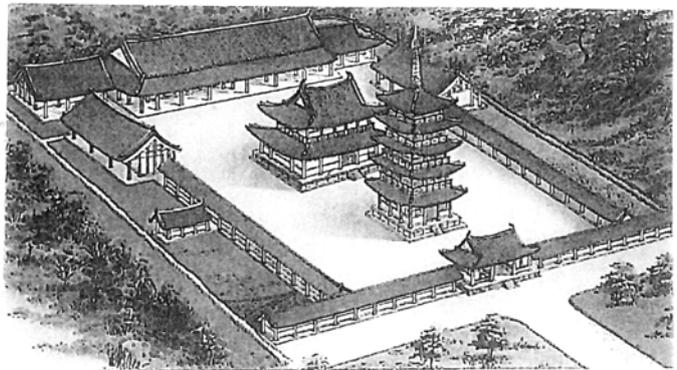
7、飛鳥寺塔心礎と舍利穴・埋納品



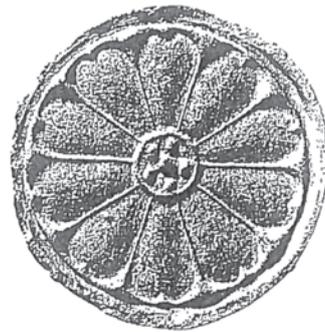
8、舍利穴埋納品



3、高句麗清岩里廢寺の伽藍



4、百濟陵山里廢寺の復原図



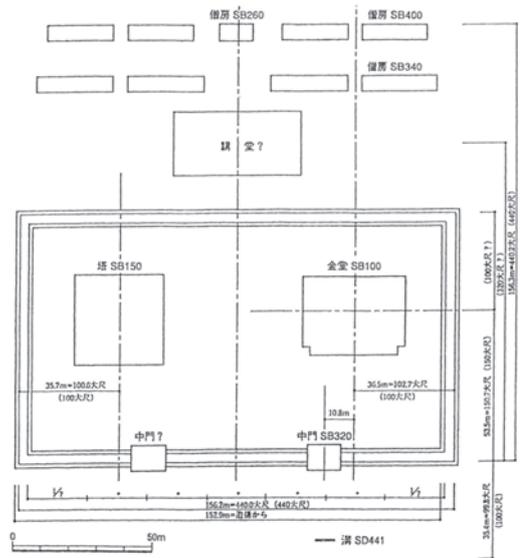
5、飛鳥寺創建軒丸瓦



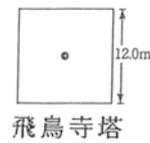
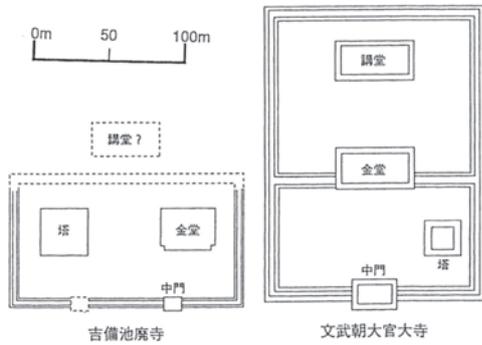
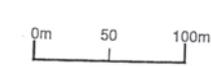
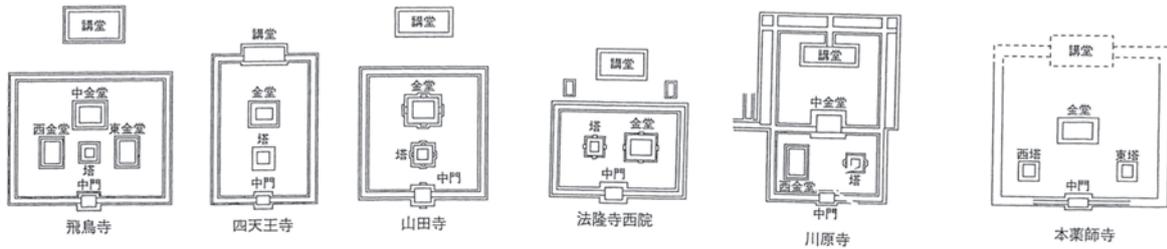
6、百濟扶余官北里遺跡の軒丸瓦



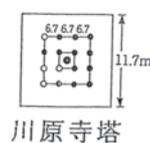
9、百濟大寺(吉備池廃寺)の金堂跡



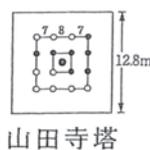
10、百濟大寺の伽藍復原図



飛鳥寺塔



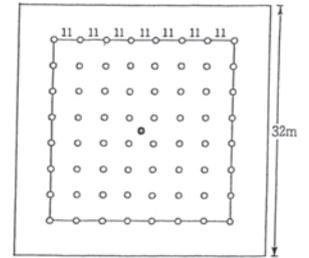
川原寺塔



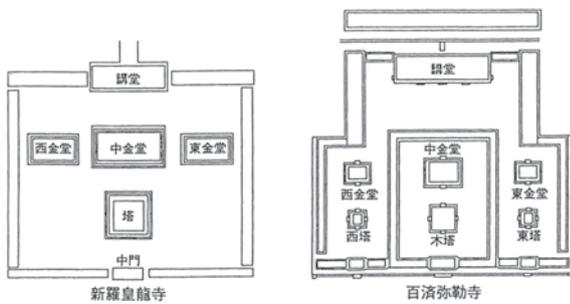
山田寺塔



法隆寺五重塔



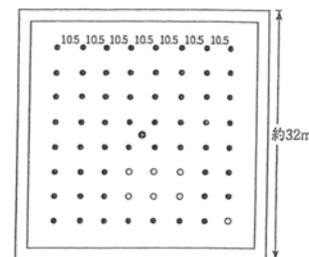
百濟大寺塔



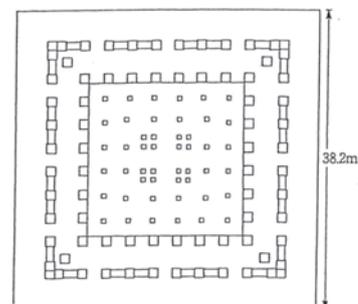
11、諸寺の伽藍配置と規模比較

新羅皇龍寺

北魏永寧寺

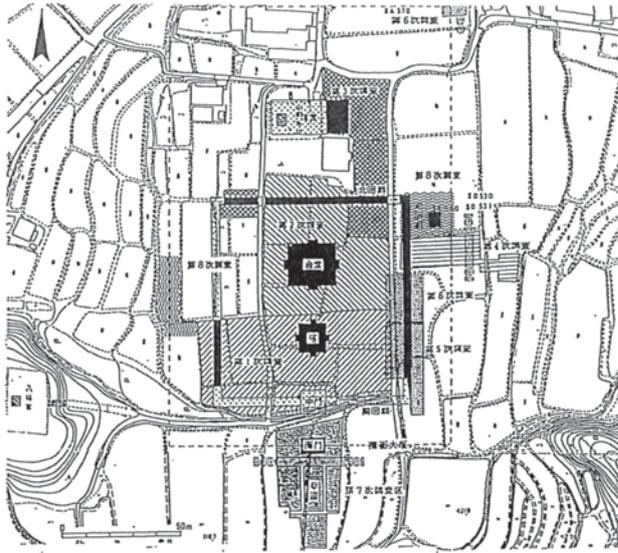


新羅皇龍寺

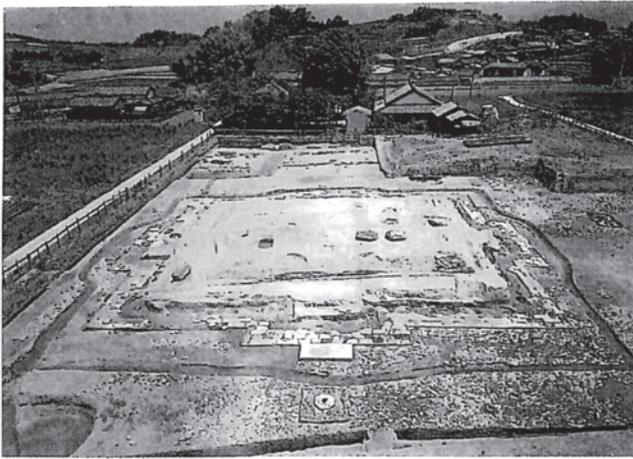


北魏永寧寺

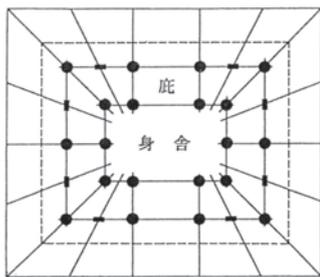
12、東アジアの塔の規模比較



1、山田寺の地形と伽藍

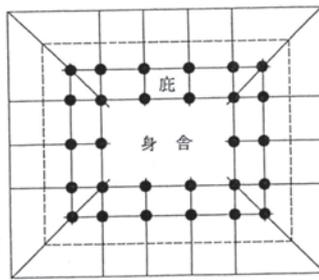
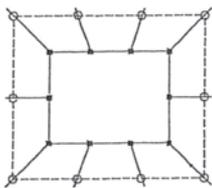


3、山田寺金堂の発掘



山田寺金堂
 □ 間柱
 ● 柱

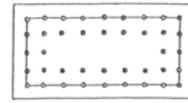
5、山田寺金堂の礎石と垂木配置



法隆寺金堂

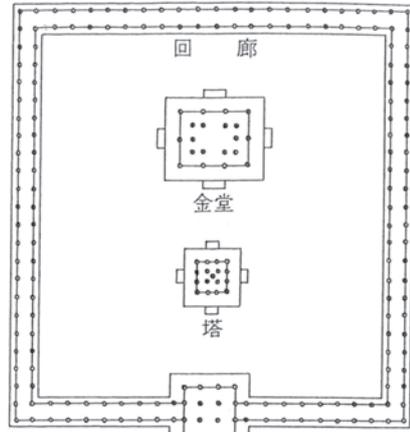
6、玉虫厨子建物と法隆寺金堂の礎石と垂木配置

M

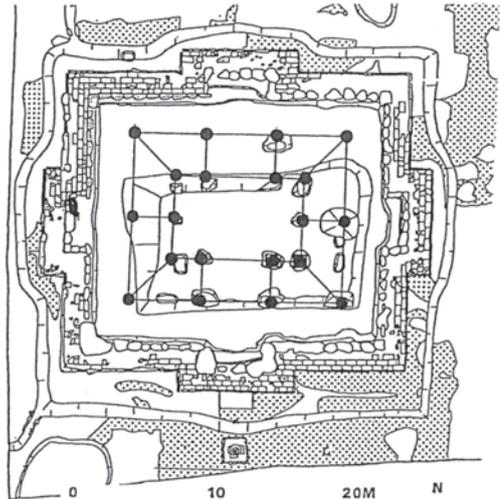


講堂

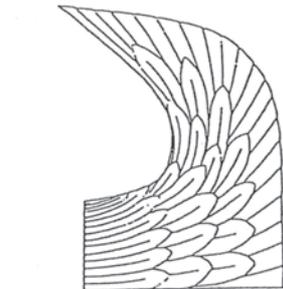
0 50m



2、山田寺の伽藍配置



4、金堂建物遺構



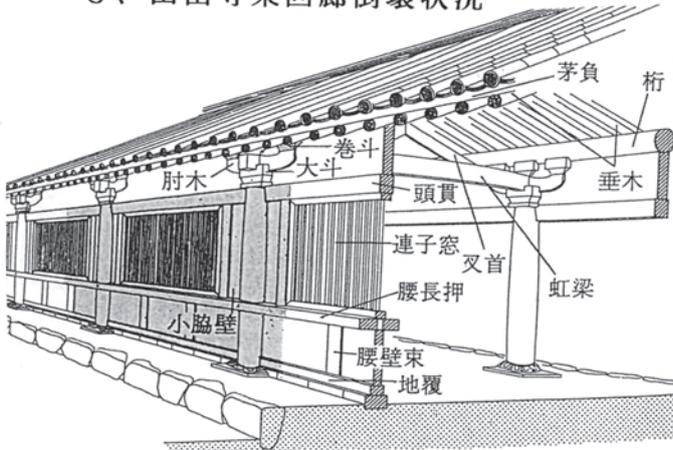
7、山田寺鴟尾復原図



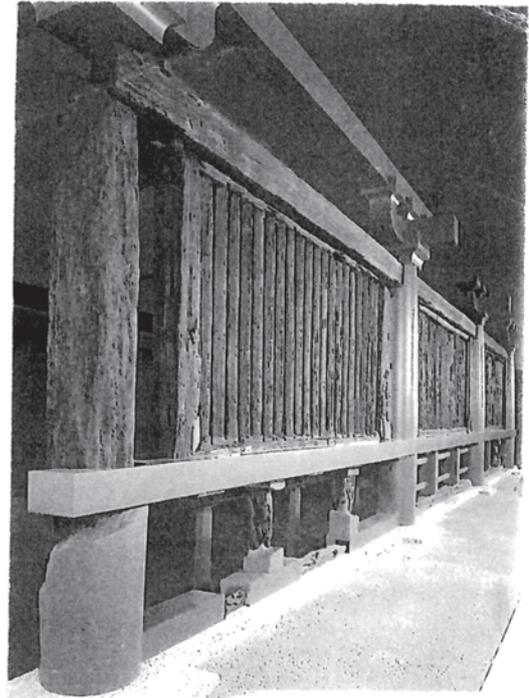
8、山田寺東回廊倒壊状況



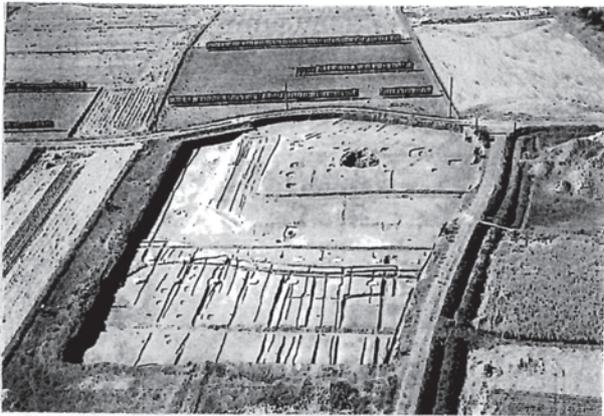
9、山田寺東回廊倒壊・瓦落下状況



10、山田寺回廊出土部材



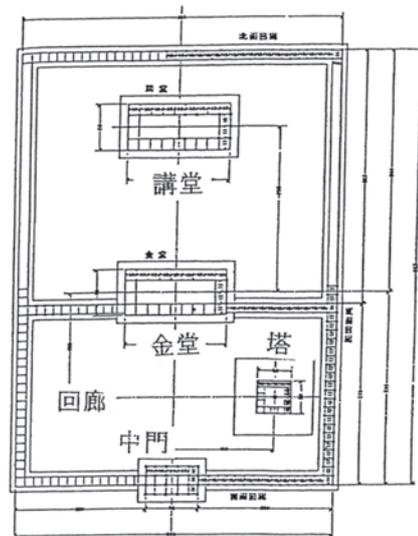
11、回廊の復原



12、文武朝大官大寺の九重塔跡と回廊跡



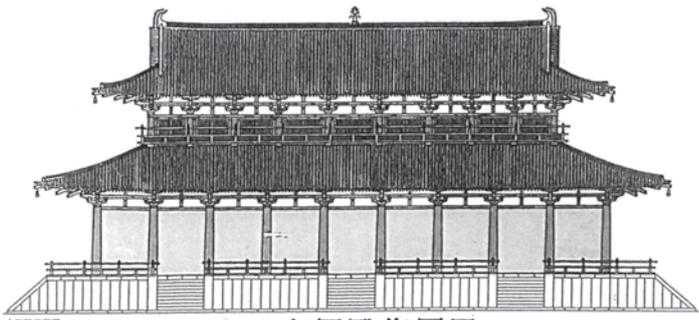
14、文武朝大官大寺の軒瓦



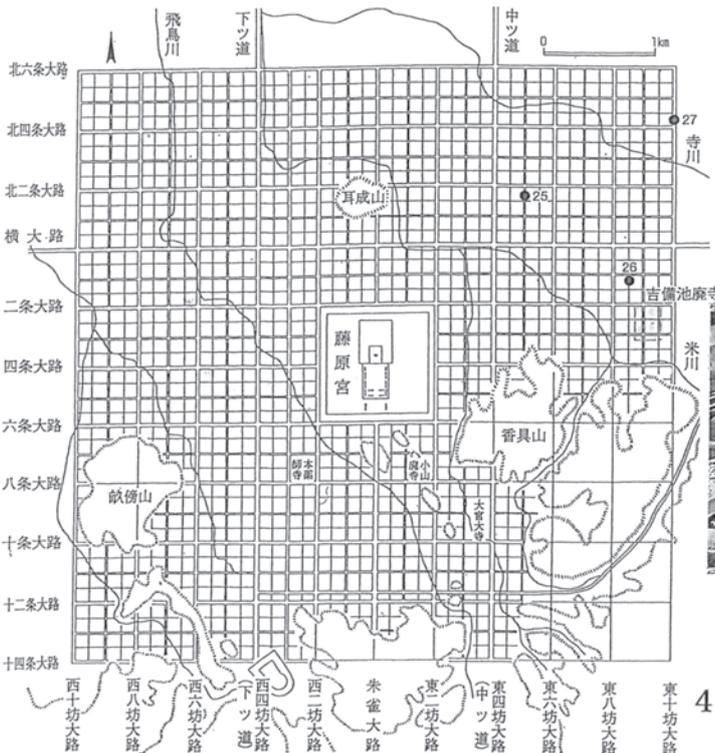
13、文武朝大官大寺の伽藍配置



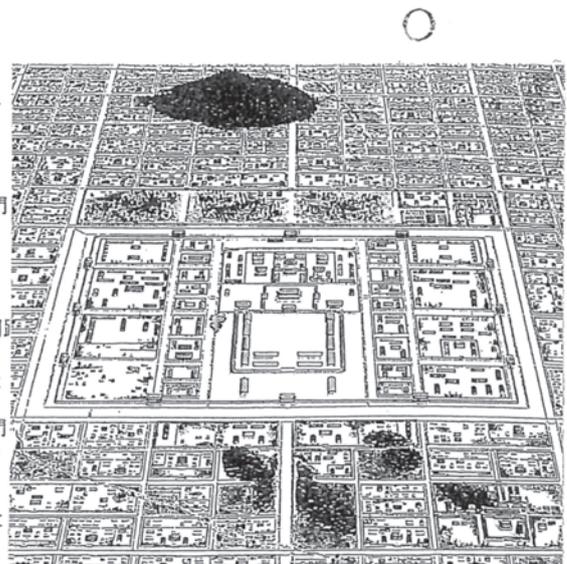
1、藤原宮全体図



2、大極殿復原図



4、新益京復原図(十里十坊説)



3、藤原宮と京の復原模型

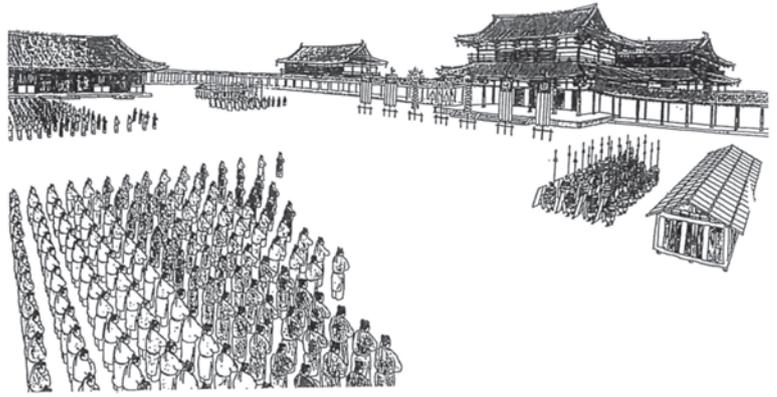
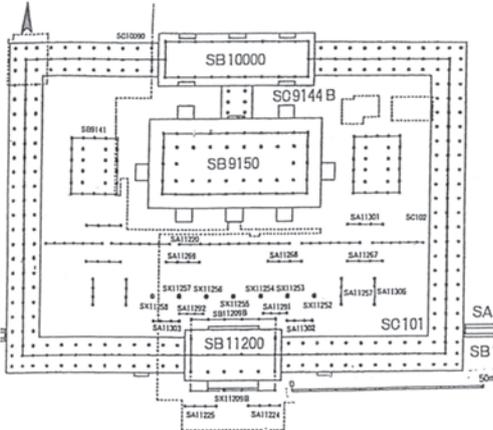


5、大極殿・朝堂院と幢竿跡発見地

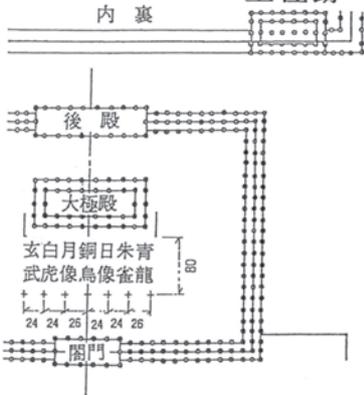


幢竿7本を立てていたと考えられる場所付近に配置 (南から)

6、幢竿跡の発見

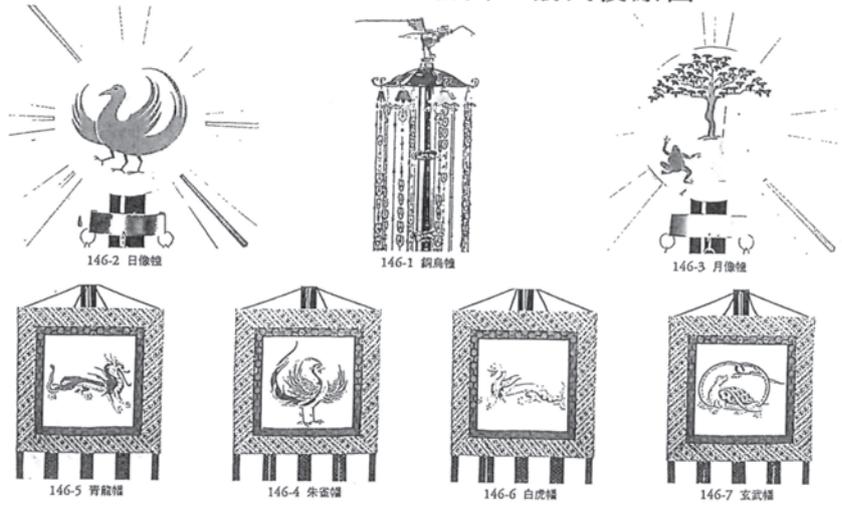


9 平城宮後期大極殿前庭の宝幢跡

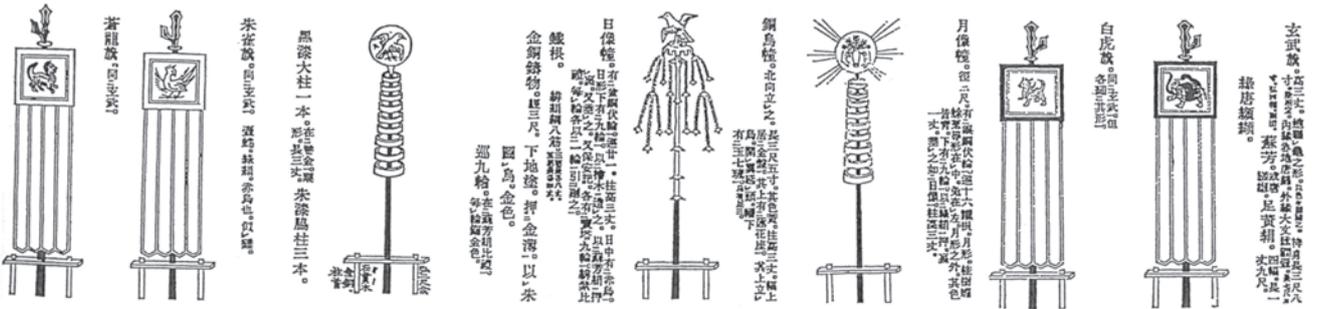


10、平城宮大極殿前庭の宝幢

7、大宝元年元旦朝賀の儀式復原図



8、七本の宝幢



11、「文安御即位調度之図」(1444年書写。12世紀頃の様子を描く)



12、藤原宮など出土の齋串・人形・馬形



13、藤原宮など出土の土馬

東の飛鳥を考える

—下野市周辺の遺跡の検討から—

橋本 澄朗

1 はじめに

私が県教委文化財保護課に勤務していた 40 年も前の思い出話から始めたい。国指定史跡壬生車塚古墳の追加指定の件で、当時文化庁で活躍されていた水野正好先生(故人 前奈良大学学長)の視察に同行した。雄弁な先生の語りに魅了されながら下野国分寺の塔跡、吾妻古墳、羽生田茶臼山古墳等、下野市周辺の史跡も視察していただいた。そこで先生は「武蔵野のような雑木林の中にひっそりと佇む史跡を大事に保存しなさい。都市化が進む中で、このような景観は貴重である」旨の感慨を述べられた。曖昧な記憶の中で、このフレーズだけは鮮明に残っている。確かに、古墳や国分寺等の保存状態は列島規模でみても卓越したものである。それは地元の方々の協力と自治体の長年に亘る適切な文化財保護への取り組みの賜物と評価したい。これらの良好な状態で保存された遺跡群は、古墳時代から奈良時代へ移行する東国の激動の歴史を語る雄弁な記念物でもある。まさに、下野市周辺は「東の飛鳥」と呼ぶに相応しい地域である。以下、「東の飛鳥」を構成する遺跡群を具体的にみていくことにする。



写真1 しもつけ古墳群と下野国分寺跡(南上空から)

2 しもつけ古墳群

まずはしもつけ古墳群。多くの研究成果があるが、小論では古墳群を精力的に研究している小森哲也氏の論考を参考に私見も交えて紹介したい。しもつけ古墳群は栃木県南部、思川と姿川に挟まれた台地上を中心に東は田川中流域まで、東西 13km、南北 14km のエリアに分布する古墳群の総称である(図1参照)。エリア内には 50m を超える前方後円墳 15 基、円墳 7 基、方墳 1 基が、6 つの支群(飯塚・国分、石橋・薬師寺、上三川・三王山、壬生、羽生田、国府)に築造されている。小森氏はしもつけ古墳群の構成上の特徴を、①卓越性(支群の大型墳は墳丘・石室とも規模的に卓越)、②階層性(墳形・規模・埋葬施設に階層差)、③継続性(6 世紀後半から 7 世紀前半まで継続)・④集約性(古墳が集中するエリアに同時期の集落がみられない)・⑤独自性(下野型古墳と呼ばれる独自性)の 5 点を指摘している。

少し詳しく説明したい。①の卓越性は県内ばかりか列島規模でみても異論のないところである。②の階層性についても近年の群集墳の調査で追認されている。③の継続性につい



第1図 栃木県南部における主要古墳の分布

小森哲也「古墳時代後期における首長墓造営域集約の背景—下野南部と出雲東部を中心として—」
『考古学雑誌』第101巻2号、日本考古学協会、2019.3より転載

て第2図から説明したい。第2図はしもつけ古墳群の支群の首長墓の変遷を示したものである。5世紀末、首長墓は宇都宮南部から姿川と思川の合流地点の近くに造られる。それが摩利支天塚古墳であり、琵琶塚古墳、吾妻古墳と120mクラスの前方向後円墳が順次築造される。吾妻古墳段階までは**飯塚・国分支群の卓絶性と求心性**は明確である。ただ、6世紀末には飯塚・国分支群は卓絶性・求心性を急激に喪失し、国府支群を除く、5支群で**80mの前方向後円墳に均質化**する事実に注目したい。この背景に地方豪族の勢力を抑制して中央集権化を志向する畿内政権の明確な**政治的意図**を読み取りたい。

この文脈で注目したいのが、最近発掘された**甲塚古墳**の調査成果である。基壇と呼ばれる墳丘第一段目から横穴式石室に向かうように円筒埴輪・人物埴輪・馬形埴輪・**機織形埴輪**から成る埴輪列と石室羨道部周辺で埴輪列の外側に**大量の土器群**が出土している。大王に貢納したであろう機織を職掌とした女性首長は一族の誇りである。彼女の葬送に際し、死者と一族による盛大な**飲食儀礼**が執行された。**手持食器**である100個を越す土師器坏は、儀礼に多くの一族が参加したことを示すもので、生産窯や器形も多様な**有蓋高坏**を中心とする須恵器は、**儀礼の盛大さ**や参加者の**階層性**を反映したものと考えられる。異例とも云える盛大な儀式執行の背景に、卓絶性と求心性を喪失した飯塚・国分支群の首長が一族の**絆**を再確認しようとする意志を推測するのは考えすぎであろうか。

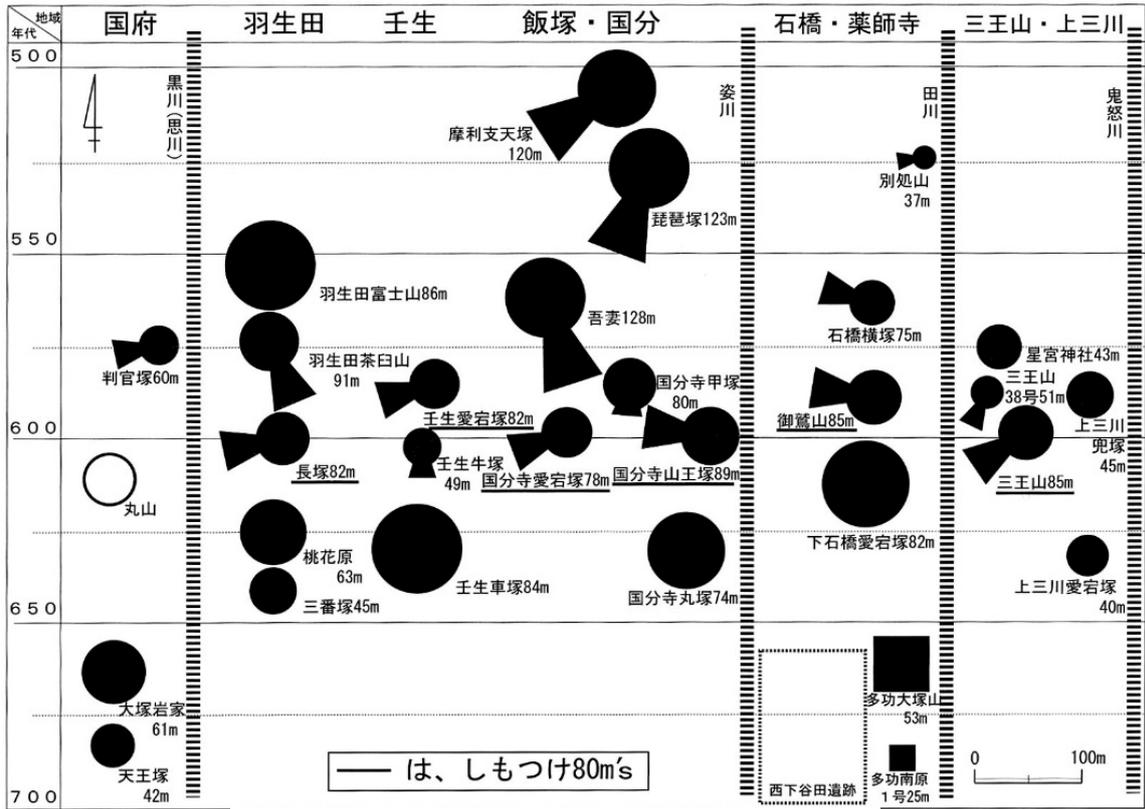


写真2 甲塚古墳から出土した土器群

④の集約性も興味深い。小森氏も指摘するように、姿川と思川に挟まれた台地上に同時期の大規模な集落の存在を想定することはできない。ただ、私が気になるのは石橋・薬師寺、上三川・三王山支群は田川流域に同時期の集落が存在した可能性が、国府・壬生・羽生田支群には未調査ながら思川の低地開発の可能性も否定できない。また、集約性と言っても、**散在的な支群のあり方**も興味深い。埼玉古墳群では築造方位の異なる稲荷山古墳系列と將軍山古墳系列の二系列の首長墓が同一墓域内に併存し、しもつけ古墳群の散在的な支群のあり方とは対照的である。このように、しもつけ古墳群の支群のあり方も重要な検討課題になる。

⑤の独自性は第3図に示したように、低平な墳丘第一段、大形切石を用いた石室、前方部のみに埋葬施設という3つの特徴を共有することで、**下野型古墳**と呼ばれている。低平な墳丘第一段は埴輪祭祀との関連、大形切石は石棺式石室との関連が指摘されるが、検討すべき課題も多い。ともかく、下野型古墳と呼ばれる特徴的な古墳築造法や埋葬儀礼を共有することで、一族の絆と結合の強固さと一体性を誇示するもので、地方豪族の中央政権に対し自律性を志向する姿勢の一端と理解したい。ただ、自律性の志向も相対的なもので、**前方向後円墳体制の枠内**であることを強調しておきたい。

しもつけ古墳群の特徴をまとめると、**広域なエリアに散在的に6系列の卓絶した規模の首長墓**を中心に**階層的な序列**を保持して**独自性豊かな古墳(下野型古墳)**が**継続的**(6世紀後半～7世紀前葉)に築造されたのである。東国でしもつけ古墳群のような変遷を確認でき



第2図 しもつけ古墳群における主要古墳の編年

小森哲也「前掲書」より転載

下野型古墳とは？

吾妻古墳 (128m)

上三川兜塚古墳の石棺式石室

壬生車塚古墳 (86m)

- 特徴1 低平な墳丘第一段（基壇）
- 特徴2 大型切石を用いた石室
- 特徴3 前方部のみに埋葬主体

下野型古墳3つの特徴

第3図 下野型古墳の特徴群

小森哲也「前掲書」より転載

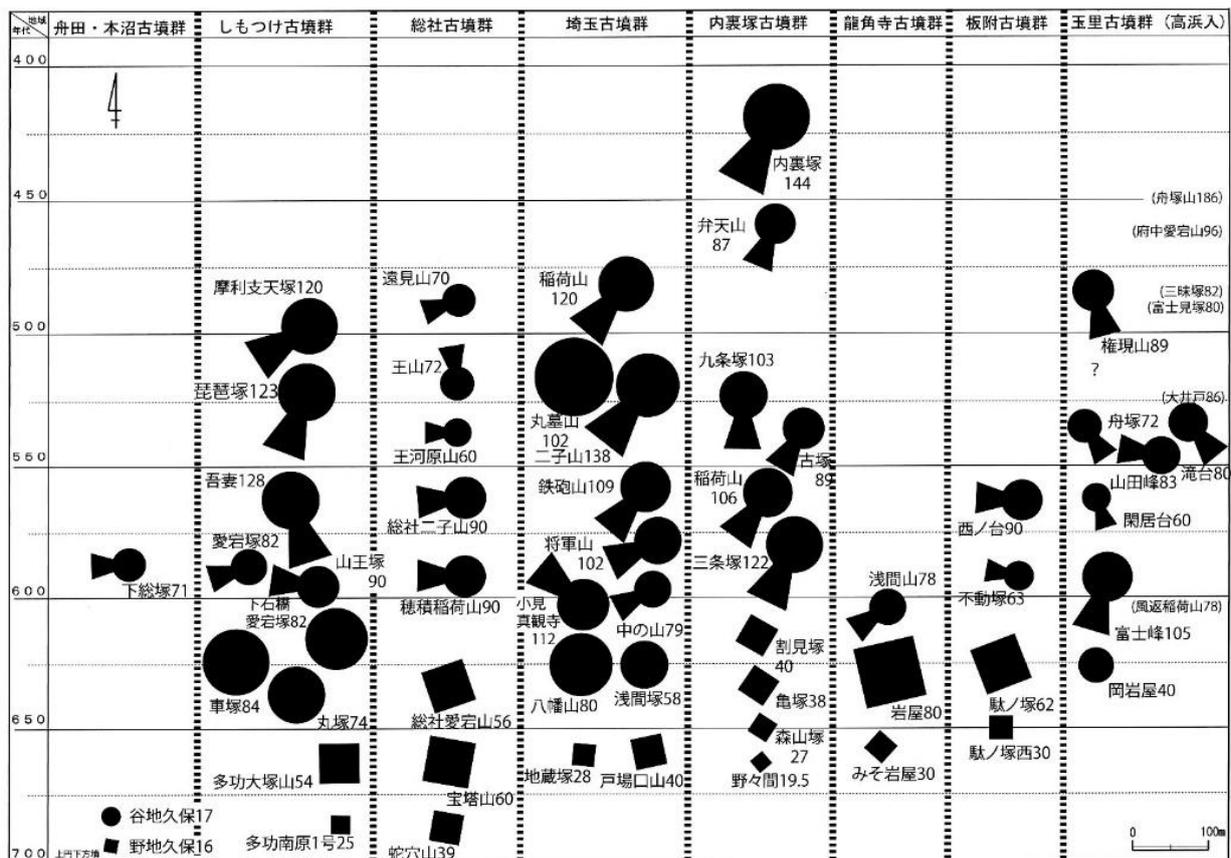
る古墳群をみていくと、第4図のように限定的である。主なものをあげると、群馬県前橋市の総社古墳群、埼玉県行田市の埼玉古墳群、千葉県富津市の内裏塚古墳群、千葉県印旛郡栄町の龍角寺古墳群、千葉県山武市の板附古墳群、茨城県小美玉市の玉里古墳群等である。

確たる根拠はないが、しもつけ古墳群を原下毛野氏(下毛野氏の先祖)の奥津城と想定すると、古墳群のあり方から原下毛野氏の支配領域(思川以東、鬼怒川以西)を想定することが可能かと考えられる。その是非は措くとしても、しもつけ古墳群は東国でも特徴的で魅力的な古墳群であることを指摘しておきたい。

3 古墳の終末

地方の7世紀史を考える時、大規模な前方後円墳を築造した首長の動向が重要な検討課題になる。視点を変えれば、地方首長が保守的な前方後円墳体制を克服し、如何に新しい律令体制に対応したかを検証する作業でもある。そこで注目したいのは、7世紀前後に列島規模で前方後円墳築造が停止した事実である。その背景には、聖徳太子が摂政として主導する推古朝(592~628)の中央集権的な国家形成を目指す政治的動向が想定される。前方後円墳築造停止後の首長墓の変遷も一律ではないようである。

まず、6世紀末葉に80mの前方後円墳が首長墓として築造されたしもつけ古墳群の動向を第2図からみていく。国府、上三川・三王山支群以外の4支群では80m代の前方後円墳に継続して、7世紀前半には大型円墳が首長墓として築造された。具体的にみていく。



第4図 5~7世紀における東国の主要古墳群の展開

小森哲也「前掲書」より転載

羽生田支群の**桃花原古墳**(63m)、壬生支群の**車塚古墳**(84m)、飯塚・国分支群の**丸塚古墳**(74m)と石橋・薬師寺支群の下石橋愛宕塚古墳は前代の前方後円墳と同規模で、同時期の列島規模でも傑出した存在である。

次に、7世紀前半での首長墓の動向を列島規模でみていくと、3つのパターンになる。Aパターンは**首長墓の築造停止**、Bパターンは**円墳で築造継続**、Cパターンは**方墳で築造継続**である。後の令制国単位でみると、Aパターンが半数強、Bパターン・Cパターンがほぼ同数で半分弱になる。畿内・山陽道・西海道・東海道の西半など**中央政権を支えた地域**はAパターンである。一方、東山道・北陸道・東海道の東半の地域は首長墓が継続するB・Cパターンが多い。具体的に東国の主要な古墳群の7世紀前半の首長墓を第4図で確認したい。しもつけ古墳群と同じ円墳のBパターンは北武蔵の埼玉古墳群、常陸の玉里古墳群、方墳のCパターンは上野の総社古墳群、上総の内裏塚古墳群、下総の龍角寺古墳群・板附古墳群である。方墳の首長墓を蘇我氏と地方首長との関係で理解する説もある。ともかく、地方首長の置かれた複雑な歴史的事情を反映して首長墓の変遷は多様な様相を示す。

ところが、7世紀中葉になると、様相は一変する。しもつけ古墳群から説明する。4支群で築造された首長墓は石橋・薬師寺支群のみになる。しかも、従来の円墳から**方墳の多功大塚山古墳**(53m)が築造される。多功大塚山古墳は下野型古墳と呼ばれる独自性を保持した古墳とは全く異なる技術(**版築技法**の墳丘、**横口式石槨**の埋葬施設)で築造されている。私は多功大塚山古墳の被葬者を、領域支配を伴う最初の下毛野国造と考えている。そして石橋・薬師寺・国府支群を除く、4支群の首長は中央政権に組み入れられたと考えている。その末裔の一人が律令編纂に活躍した**下毛野古麻呂**である。一方、列島規模での7世紀中葉の首長墓の動向をみると、半数強が築造を停止する。築造を継続する首長もCパターン、方墳が優越するようである。そして、7世紀後葉には首長墓の築造は停止し、中央集権的な律令国家の建設を目指す**役所・道路・寺**等々、公共事業の槌音が響く時代を迎えるのである。

4 役所・道路・寺の建設

最初に、第5図の解説から始めたい。作者は不明だが行基図と呼ばれ、江戸時代以前の唯一の日本全図である。平安時代後期の**三善為康**の編集した『**懷中歴**』から転写し、鎌倉時代の事典『**二中歴**』に掲載されたものである。日本列島の形を示さず、七道毎に国が串刺しの団子状に表現されている。宮都を中心とする中央集権国家を目指す**中央と地方**の関係を端的かつ視覚的に示すものと考え紹介した次第である。まずは、中央での歴史のうねりを確認しておきたい。

中央集権的な律令国家を建設するためには多くの困難があった。まず、人口構成を把握する**戸籍**や税収見込みを計算する**計帳**の作成が律令政治の基本的なデータとなる。そして、**五畿七道、国・郡(評)・里(郷)**という行政区画と中央



写真3 北台遺跡

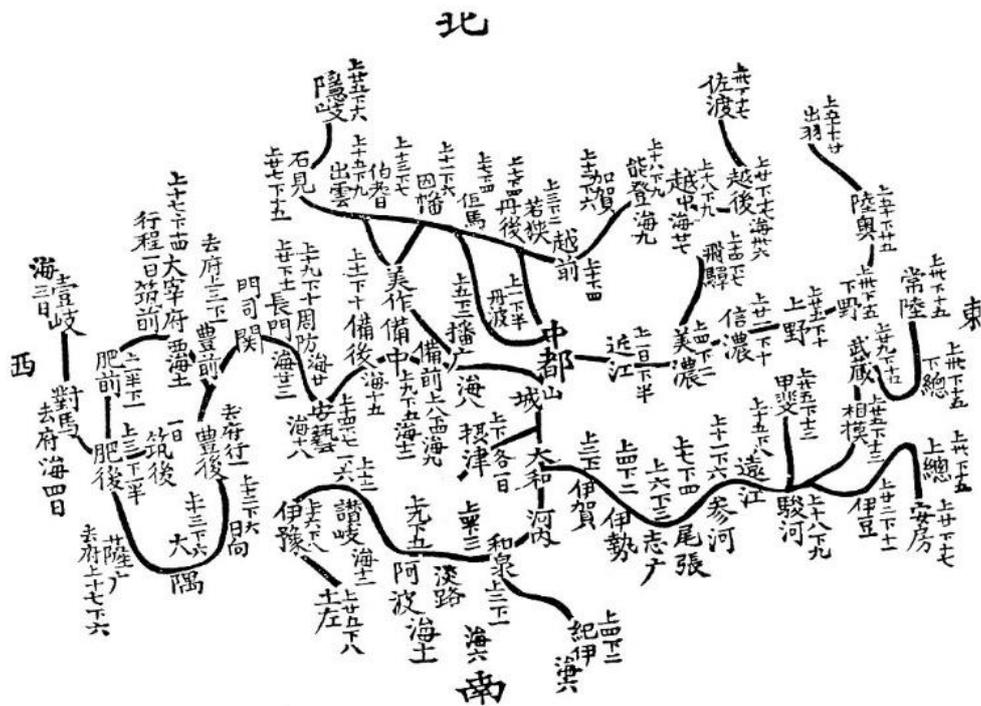
では二官八省、地方では国府・郡衙の行政組織を整備し、中央と地方を結ぶ道路（駅伝制）の建設も重要である。さらに、護国を祈念する仏教の寺院建設も必要になる。この困難に挑戦し、この国の形を完成させた歴史の中心舞台が奈良の飛鳥地域であった。

一方、地方から7世紀後葉の歴史を考えると、律令政治を執行する地方官衙、宮都と繋がる道路、護国の寺院の建設を検討することになる。支配者の墓造りから役所・道路・寺造りと大きく歴史は転換することになる。

下野市周辺での律令国家成立期の遺跡を簡単に紹介する。まずは役所から。下野市に西隣する思川左岸の低地上に下野国府が建設され、下野市に北隣する上三川町では河内郡衙の多功遺跡や茂原・上神主遺跡が所在する。次に、都へ繋がる東山道駅路も下野市内では北台遺跡、諏訪山北遺跡、三ノ谷遺跡で発見されている。そして、下野薬師寺である。下毛野氏の氏寺として7世紀末葉に建立された下野薬師寺は、奈良時代には日本三戒壇の一つで東国唯一の国立寺院であり、仏教による護国の寺の象徴的存在になる。さらに、聖武天皇の詔で建設された下野国分二寺と展開する。まさに、7世紀後葉から8世紀前半は列島規模での公共事業の時代でもあった。



写真4 南上空から見た下野薬師寺跡



第5図 『二中歴』日本図

市大樹「すべての道は平城京へ 古代国家の〈支配の道〉」
『歴史文化ライブラリー321』吉川弘文館、2011.6 より転載

興味深いことに、この時期に先端技術を保持した新羅人の活動を想定可能な遺跡が発掘調査されている。すなわち、下野薬師寺に隣接する**落内遺跡**と茂原・上神主遺跡に西隣する**西下谷田遺跡**から相当量の**新羅土器**が発見されている。そこから新羅人の存在と、新羅人の下野薬師寺や河内郡衙の建設に関与したと想定される。また、新羅土器が河内郡に集中しているのは、河内郡を本貫とする下毛野氏の存在と考えることが妥当な解釈であろう。さらに、この事実は『日本書紀』に記載された持統天皇元年(687)・同3年・同4年、下毛野への**新羅人移配記事**とも符合し、律令政府が東山道北端に位置する下野国を重要視した結果であろう。



写真5 西下谷田遺跡から出土した新羅土器

5 結びに

最後に、若干の個人的感慨を述べて小論を結びたい。ほぼ半世紀も前になるが、奈良文化財研究所の長期研修に参加し、平城宮出土の土器を観察する機会を得た。**律令的土器様式**を実感すると共に、本県の奈良時代の土器との違いを感じた。研修から帰って最初の大きな仕事が新4号国道建設に伴う下野市**薬師寺南遺跡**の調査であった。同じ頃調査した真岡市井頭遺跡の奈良時代の土器と比較すると、丁寧に篋磨きされた皿状の土器(盤形土器)は特徴的で**都振り**であった。下野市域の古代の**先進性**を痛感した。薬師寺南遺跡からの学びが私の考古学の原点である。「東の飛鳥」、下野市周辺の遺跡は多くのことを学ぶことができる魅力に満ちている。遺跡からの学びの楽しさと重要性を指摘し、私の結びとしたい。

飛鳥時代の主なできごと

A. D.	天皇（即位）	主な宮	できごと	関連する遺跡	
600	推古（592）	豊浦宮（592）	596 飛鳥寺の完成		
		小墾田宮（603）	600 第1回遣隋使 603 冠位十二階制		
620	舒明（629）	岡本宮（630） 田中宮（636）	623 新羅に討伐軍派遣		
			626 蘇我馬子没し、桃原墓（石舞台古墳）に葬られる		
			630 第1回遣唐使		
			639 百濟大寺の造営		
640	皇極（642） 孝徳（645）	百濟宮（640）	641 山田寺の造営		国分寺丸塚古墳の築造
		板蓋宮（643）	645 乙巳の変（大化の改新）		
		難波宮（645）	646 改新の詔		
650	齊明（655）	後岡本宮（656）			
		朝倉橋広庭宮（661）			
660	天智（661）	大津宮（667）	663 白村江の戦	多功大塚山古墳の築造	
			664 防人を置く 669 第7回遣唐使		
670	弘文（671） 天武（673）	浄御原（672）	670 庚午年籍	落内遺跡（下毛野氏に関連する遺跡）	
			671 漏刻の使用開始 672 壬申の乱		
680	持統（686）		684 八色の姓		
			687 帰化した新羅人を下野国へ移住させる		
700	文武（697）	藤原宮（694）	689 飛鳥浄御原令の施行 690 庚寅年籍		西下谷田遺跡（新羅土器） 下野薬師寺の建立
			701 大宝律令の制定 国号を日本に改める		
			702 第8回遣唐使（再開）		キトラ古墳の築造 高松塚古墳の築造
			709 下毛野朝臣古麻呂没		
		平城宮（710）	710 平城京へ遷都		

※飛鳥時代とは、飛鳥に宮都が置かれていた崇峻天皇5年（592年）から和銅3年（710年）までの118年間を指し、古墳時代の終末期と重なります。



南河内地域（遠つ飛鳥）と大和地域（近つ飛鳥）を結ぶ大道



下野薬師寺創建の瓦

シンポジウム

「古代の下野を探る－飛鳥と東の飛鳥－」

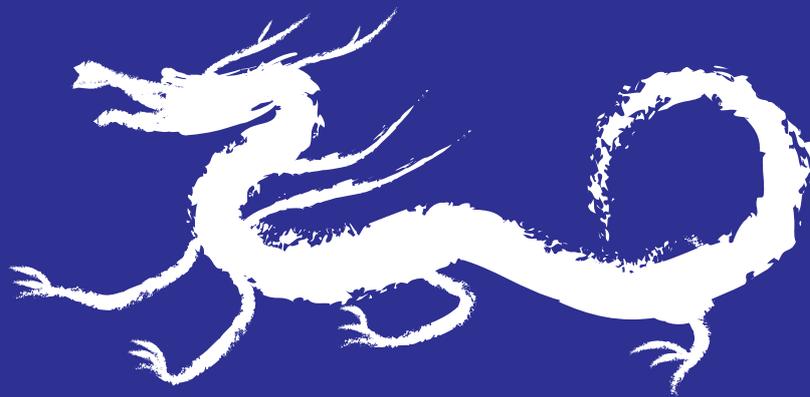
発行日 令和元年 11 月 30 日

発 行 下野市教育委員会

〒329-0429 栃木県下野市笹原 26 番地

TEL：0285-32-6105

本事業は、文化庁文化芸術振興費補助金及び
栃木県「わがまち未来創造事業」の補助を受
けて実施しています。



東の飛鳥

Higashi no Asuka

下野市には、しもつけ古墳群や下野薬師寺・下野国分寺・尼寺など東国を代表する重要な遺跡が多数存在します。

本市では、東国における飛鳥地方のような、本市特有の歴史的特性を「東の飛鳥」と名付け、文化財の総合的な活用による地域づくり事業である「東の飛鳥プロジェクト」を進めています。

東の飛鳥プロジェクトのロゴマークは、古代の思想で東方を守護するとされていた、想像上の生物である「青龍」のイメージとカラーを図案化したものです。